

## 「高大接続のための英語教育シンポジウム」

日時 平成 19 年 2 月 20 日（火） 17:00 ～ 19:00  
会場 新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟D棟 1 階大会議室  
参加者数 52（学内 23、学外 29）

開会の挨拶（新潟大学人文学部長 芳井研一）

### 第一部

永村邦栄（新潟県立巻高等学校 教諭）

現在の高等学校の英語カリキュラムについて

恩田公夫（新潟大学教育研究院人文社会・教育科学系〔経済学部〕教授）

平成 17 年度以降の新潟大学における英語教育

平野幸彦（新潟大学教育研究院人文社会・教育科学系〔人文学部〕助教授）

新潟大学全学英語カリキュラムに関する学生アンケート結果報告

### 第二部

萩野俊哉（新潟県立新潟南高等学校 教諭）

新潟大学の入学試験と高等学校の英語教育

高橋正平（新潟大学教育研究院人文社会・教育科学系〔人文学部〕教授）

大学生に望む英語力——文系教員の立場から

松尾正之（新潟大学教育研究院自然科学系〔理学部〕教授）

大河正志（新潟大学教育研究院自然科学系〔工学部〕教授）

大学生に望む英語力——理系教員の立場から

### 質疑応答

司会：本間伸輔（新潟大学教育研究院人文社会・教育科学系〔教育人間科学部〕助教授）

主催：新潟大学人文学部・新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室

# シンポジウム報告

## 開会の挨拶（芳井人文学部長）

人文学部長の芳井でございます。本日はわざわざ本シンポジウムにご出席いただきまして、大変ありがとうございます。高校と大学との間では、何年も前から高等学校長協会と新潟大学との協議会が定期的にかかれていています。私などはそこでの大卒の議論というより、もう少しきちんと現場の先生方が相互に角つきあわせて話をする機会を積極的にもったほうがいいのかねがね思っていました。これは協議会が発足したときから言っていることですし、書いていることでもありました。

そういう意味で、今日みなさまのご尽力によりまして、こういう会を開くことができるようになりまして、大変うれしく思います。ぜひ有意義な会にさせていただきたいと願っております。

新潟大学では全学の英語教育をどうやって改善していくかについて、何年にもわたって検討され、関係者の努力による成果が積み上げられてきています。これは全学教育の最重要課題の一つでもあるわけですが、実はなかなか改革という方向では新しい段階に進んでいけないという状況があります。今回、高大接続を射程においた英語教育の諸問題を議論していただくなかで、新しい何かが得られることを期待しております。私たちの方でも様々の可能性を模索し、可能な改革に着手する方向で進めていくことが出来ればと願っております。

本日は多数の先生方にご出席していただきまして、大変ありがとうございます。どうかよろしく願いいたします。

## 第一部

### 現在の高等学校の英語教育について（永村講師）

巻高校の永村です。巻高校と言いますと周囲に非常に緑豊かな——茶色と緑がよく見えますが、旧新潟市内ではグレーしか見えない、ということですね。もしよかったら、どうぞ転勤してきてください。

私は今 3 年生担当していきまして、前期試験で非常にあわただしい毎日です。生徒の方ももうすぐこの大学にもお世話になりたいと思い、努力している毎日です。ですから、3 年生担当ということで、ちょうどタイミングもよかったかなと思っております。この 3 年間どういうふうやってきたかということも含めて、この 10 分から 15 分の間発表させていただきたいと思います。

タイトルは、「現在の高等学校の英語カリキュラムについて」ということで、私の資料、発表テーマがそのようになっているものですが、10 数校の先生方から助けていただきまして、このような表ができました。10 数校の中には専門高校も入っておりますが、普通科の英語単位数のサンプルだけを挙げてみました。

資料 1 の「1.2 考察」というところが空欄になっていますが、私の考察だけではなく、先生方の目から見られた考察をメモしていただくスペースとして、意図的に空欄にしてあります。

この表は先頭が巻高校になります。私のところのカリキュラムになります。その次は A1 校、A2 校、A3 校となっておりますが、ここの共通点は何か、ということになります。

その前に、一番最後の D 校を除きますと、1 年生、2 年生はほとんど共通です。B3 校だけが選択をとれるようになっていますが、2 年生まではほとんど同じということになります。なお、高校では 50 分授業を週 1 回実施すると 1 単位とカウントいたします。

戻りますが、A1 校～A3 校には共通した点があるのですが、見ていただくと結局 3 年の文系で選択必修（科目の位置づけとしては選択科目であるが、実際には全員選択しなければならない）を 2 単位ずつ必ず設けてあるというのが共通であります。ちなみにカッコは選択自由を表します。

それから B1 校～B3 校までの共通点は、3 年文系で選択必修は設けておらず、選択自由のみということが共通しています。それから C 校になりますが、3 年生の文系、理系のところが、ライティングが 3 単位ということで、1 単位多い学校です。

D 校は、英語Ⅱが 5 単位ということで、かなり多い学校になると思います。

そういうふうな、A、B、C、D という 4 種類の特徴を持った学校群に分けられるというのが表の数字から読みとれるところです。

考察に入るわけですが、表には新潟大学に卒業生がお世話になっているような学校をサ

ンプルとして挙げましたけれど、おおまかに言いますと2年生までは共通であり、3年の文系が4・2・2の8単位で行い、理系では4・2の6単位で行われているということが傾向として見られます。おそらく選択自由では文系の生徒は2単位とっていると思います。理系の方はほとんどとっていないくて、たとえば私立型である生徒たちだけが特別にとっているというなかたちだと推測されますので、3年生の文系が4・2・2の8単位、理系が4・2の6単位でなんとか英語の学力をつけていっているということが分かります。

そして私の2つめの考察ですが、そうすると2年次までは理系を強くしていかなきゃいけない。3年生になりますと物理、数学とかが入ってきますので、英語にはなかなか十分な時間や力を注ぐことができない。それに対して文系ですが、文系は3年次で伸びてきます。当校でも実際のところ今の3年生は、2年次の定期考査や模擬試験では、理系が抜群に成績がよかったです。定期考査のクラス平均点は2桁くらい違うのです。ところが、3年の2学期、最後の定期考査は文系に逆転されています。それは理系が落ちてきたというよりも、文系が2単位多いものですから伸びてきているというのが実際の定期考査での結果です。

もう1点あります。OC（オーラルコミュニケーション）Iの扱いですが、今現場でおそらく困っているのはそのOC Iということで、ALT（Assistant Language Teacher 外国語指導助手）が今年度から大幅に削減されまして、巻高校でも昨年まではベーススクールのALTがいてくれましたので、われわれの学年は困っていないですが、全県でJETプログラムのALTが10人まで減らされまして、ベーススクールが激減し、OC Iの2単位というものをどう実施していくのかということが今後の問題として出てくると思います。以上がこの表についての話です。

実際生徒の学力という面から考えてみますと、そのバックグラウンドとして、実は今の3年生は、高校1年生に入学したときに中学校で絶対評価がなされた1期生に当たっています。それから新教育課程を中学校から全学年通した1期生なんですね。で、正直英語の学力は3年前に私が学年を担当したときよりも随分低いなという感じがしました。手ごたえが非常に少ないのです。そういう特徴がある学年です。ところが、不思議なのですが、業者による模擬試験を実施していますが、とんでもない低い結果を出すのではないかなと予期していたのですが、意外と全国的に悪くないんです。全国のレベルが落ちているのではないかというふうに最初は思っていたのですが、おそらく二極化しているのだろーと思われれます。日本全国できる子はあいかわらずできるけれど、できない子がたくさんになってきているのか——国立大学レベルの大学に入る7、8万人くらいの生徒の学力は維持されていながら、あとは学力が低下しているのではないかと感じました。

それから週5日制という問題がありますが、巻高校は土曜講習というものをいっさいやっていないのです。隔週のみに行われている高校さんがたくさんあります。それによって学力向上に対応されています。

それから今の学年は国公立大学入試5教科7科目がほぼ固まってきた。そうすると、このカリキュラムで与えられた時間内に、先ほど述べた入学時のバックグラウンドからスタ

ートし、たとえば新潟大学の個別試験までの学力をつけるということが課題になる。どう  
いうふうにやっていったらいいのか考え、どこかで失敗すると無駄な時間ができるので、  
私個人の感想ですが、教材の見方というのをしっかりやっていないと、とりかえしがつ  
かなくなってしまうというのがあります。ですから、学習発達段階に応じた使用教材選定  
や使用時期を随分研究しながら進めていく必要があります。また、大規模校ですと教師が  
数人でチームを組んでやっていますので、そのチームの教師と共に指導法を企画し、お互  
いに理解し合いながら進めていくということが随分労力を使うところだと思います。

2枚目の資料2ですが、細かいところはあとで見ていただきたいと思います。左の方から、  
英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語リーディングとなっており、教科書を早めに終わらせていくという  
ことですが、私の学年では3年次の10月にしかリーディングの教科書を終わらせられませ  
んでした。というよりも終えなくていいとの計画でした。英語ライティングのほうでは教科書  
は2年生の2月からです。それまでの間は『Forest Extensive English Grammar Training  
Book』というのをやっていますが、これは文法の1年次のところを見て欲しいんですが、  
文法は一度教科書を終えています。しかし、1回じゃだめなので2年生の5月からもう1  
回、2ラウンド目としてこの『Training Book』をやって、そのときには『Forest』のあの  
分厚い参考書なのですが、その読書も含めて、1時間の授業の中で両方やるということです。  
それが2月までありました。

週末課題と語彙をセットで見ていただきたいのですが、語彙ノートというのがあるので  
すが、とにかく自分の知らない英単語を小学生の漢字の書き取りのようにどんどん書かせ  
て提出させました。そして2年生の10月までは我慢して、市販の単語集は一切与えませ  
んでした。市販の単語集については痛い思い出がありまして、意気込んで1年生からやると  
投げってしまう、知らない単語ばかり出てくるのでおもしろくないということで、わざと2  
年10月まで持たせないで、教科書や試験に出てきたものを全部何回も書かせて提出させま  
した。ですから、2年10月に与えた『音読英単語1』を与えたときに、子供たちは「先生、  
わりと知っている単語が多い」「これだけでいいんですか」と言いました。与えてから3か  
月間バンバンと小テストをやっちゃいまして、1年生は学年の方針ですでに『音読英単語1』  
を持たせていましたので、1月には1年生の範囲に合わせた1、2年共通問題で競争をしち  
ゃおうということで1・2年合同単語テストを実施しました。お互いの学年がよい刺激を受  
けました。

リスニングはOCⅠでALTに問題を作ってもらって、2年生からは『Hyper Listening』、  
3年生では『Listening Essentials 2.5』を自学自習させ、定期考査に出題しました。3年生  
夏休みには『アップリフト』という教材を使いました。

その他、本日教材の実物を2冊2セット持ってきましたので、回覧してほしいのですが、  
中学校で買わせられる『英語の新研究』というものを、入学してから5月の連休までの間  
に週2回、朝50分間、学校が始まる前に補習させました。約50人の参加で、なるべく英  
語に自信がない子ほど来なさい、ということで1冊ざっと全部やるんです。中学校で結構

わかっていないんですね。それで、この『英語の新研究』に紐を付け、「何年何組」のようにルーム名を書いて、それぞれの教室の黒板の脇に 1 冊ずつ引っ掛けておいて、先生方にも各クラスに 1 冊ずつあるので、授業で質問してわからないことがあったらここに書いてあるから休み時間に見ておきなさいと言ってくださいとお願いし、1 年間ずっと下げてくださいました。

そして 3 年生からですが、文系選択英語のところに、『長文と文・作・語法の 18 章』というのがあります。理系の方はほっとくわけにはいかないのですが、3 年生の補習というところですが、理系も同じ教材を使用し、遅れをとらないように余裕のある子は補習を受けなさい、ということでやりました。

3 年生夏休みに初めて、センター試験の問題集に触れさせました。

3 年生 9 月からは『長文と文・作・語法の 20 章』という教材に進みました。また、この時期から文理ともに国公立系の長文の過去問を補習でやりました。10 月になりますと、英語リーディングの教科書が終わりましたので、『MAKE YOUR ASCENT TO BETTER ENGLISH READING』という長文集と、ライティングの方も教科書は終わりましたので、『英語頻出総合問題集ポイントアップ』の発展編を——2 年生のときには週末課題として、1 月あたりからプレ標準編という易しい方をやっていたのですが、3 年生の 10 月には、もう標準編はとばして発展編を使いました。

12 月にセンター試験直前演習を 1 冊だけやりました。『ASCENT』は半分以上終わったのですが、残りは自学自習とし、1 月はセンター試験が終わってから『MAKE PROGRESS IN ENGLISH READING』という上級英語長文問題集をやらせました。『PROGRESS』を使ったのは、ここまで力がつけばどこの大学でも大丈夫というレベルまで生徒の学力をもっていきたかったからです。最低でも『ASCENT』のレベルまでは、『PROGRESS』をやっていると、生徒は「『ASCENT』は楽です」と言うので、子供ってすごいなと思います。最初の中学生用の『英語の新研究』というレベルから、わずか 3 年間で『PROGRESS』のレベルまでもっていくというのはなかなか大変ですが、全員ではないにしろ、何とかやれるようになっていきます。

資料 3 は時間がありませんので、後ほど質問がありましたらお受けいたします。簡単に述べますと、各学年の到達目標をできるだけ具体的に記述し、指導に当たる教師間でコンセンサスを得ながら指導に当たってきたということです。もう 1 点、英語は継続性が肝心ですから、2 年生までは定期考査の範囲に必ず語彙と文法の既習事項を出題し続けたというのが新しい実践でした。効果はあったと考えます。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 平成 17 年度以降の新潟大学における英語教育（恩田講師）

経済学部の恩田と申します。新潟大学の全学向けの英語教育は、英語を担当している専任の英語教員が「英語部会」という組織を作って運営しているわけですが、私はその英語部会の代表をつとめております。

資料が 2 枚ありますが、ご覧になりながら話をお聞きください。

ご存知のように新潟大学は平成 16 年度に独立法人化という、大きな変化を経験いたしました。それにもなって教育制度・体制の様々な見直しが行われました。いわゆる教養英語についてもその際大きな改革を迫られまして、平成 17 年度から新しいカリキュラムで実施しております。その際どういう経緯があったかにつきましては、今日は時間ありませんので割愛させていただきます。

今日は平成 17 年度以降実施されている新潟大学の英語教育について説明させていただきます。

新潟大学で現在行われている英語教育は、私ども英語部会が責任をもって運営を行っている、いわゆる全学向けの英語科目が一方にあって、もう一方に、各学部が責任をもって自学部の学生向けに企画・運営を行っている英語関係科目の、2 種類からなっています。このうち英語部会が運営している英語科目はさらに 4 つに細かく分けられるのですが、この 4 つを総称する正式な名称はありません。

今日は説明のための便宜上、私どもが運営を行っている全学的な英語科目を「全学英語」と呼び、各学部が独自に開講している英語関係の科目については「学部英語」と仮に呼ばさせていただきます。

全学英語と申しますのはいわゆる教養英語のことだにご理解いただいて結構です。この全学英語と学部英語をどんなふうに組み合わせ、どれだけの単位を学生にとらせて、最終的にどういう英語教育を学生に行うのかは、各学部が決めるということになっています。今日のシンポジウムは高校と大学の接続という観点から話し合いを行うことが主題ですので、私の話は全学英語、それも特に新生が 1 学期に履修することになる「共通英語」という科目に特に重点をおいて説明をさせていただきます。

まず、共通英語ですが、1 年生が 1 学期にとる科目で、英語を選択した学生はこの科目を履修することになっています。半年間週 1 回 1 単位の科目で、この授業は学部別に分かれており、入試成績等に基づいて習熟度別にクラス編成が行われています。

この共通英語は全て日本人教員が担当しています。1 クラスだいたい 40 人くらいの定員で行っております。教養英語は教養部があった時代から、学部別にクラス分けがされていたわけですが、同じ学部の中でも英語の学力差が結構大きくて、英語が得意な学生にとっては非常にやさしい授業で、逆に英語が苦手な人にとっては非常に難しいということがありました。それが近年、入試方法の多様化などによって、この英語の学力差が大きくなったということが一層激しくなってきたという事情もあり、平成 17 年度の改革に際して、思い切っ



て習熟度別のクラス編成を導入しました。これによってひとつひとつのクラス内の学生の英語力をできるだけ平準化して授業をやりやすくし、効率化を図りました。

この共通英語の科目のねらいは次のように謳っております。「高校までの知識を再構成し、大学生にふさわしい読解力を習得する。」したがってこの共通英語では高校までの英語教育と、その後の大学での学部での専門教育との接続を重視して、主に文法などの知識を始めとする読解力の養成を中心にした授業を行っています。

その一方で、この共通英語の中でリスニング教材や統一副教材などを併用することにより、1学期の終わりに1年生全員が受験することになっている TOEIC IP テストの準備も兼ねる内容にしています。

授業は1コマ90分ですが、そのうち60分はリーディングを中心に指導し、30分程度は TOEIC 対策としてリスニングの指導にあてています。統一副教材といたすのは、文法や構文、イディオム、発音といった分野について新潟大学の学生として習熟すべき項目内容を示しているもので、この全学英語の到達目標と言えるものです。

これは平成17年度以降の新しいカリキュラムの柱のひとつとして作成したもので、毎年新入生全員と共通英語を担当する教員全員に配付されています

先ほど申しましたが、TOEIC は、平成17年度以降の改革の大きな柱として導入されたもので、7月中旬、第1学期の末に1年次学生を対象に実施されます。この TOEIC で470点以上に達しなかった学生については、まだ基礎的な学力が不足しているということで、さらに基礎的な英語力の強化・定着を図るために2学期に「基礎英語」という科目を受講させます。

一方470点以上の得点を収めた学生はすでに基礎的な英語力を備えているとみなして基礎英語の単位を認定します。そして2学期には基礎英語の上位科目にあたる「発展英語」という科目に誘導します。

なお平成17年度、18年度の2回、TOEIC を行ったわけですが、470点以上とって基礎英語の単位を認定された学生は新潟大学全体で3割程度でした。学部によって大きな差があるんですが、全体を平均すると3割程度でした。TOEIC はこのように基礎英語の単位を認定したり、基礎英語のクラスを習熟度別に編成する際の資料としても利用しています。

TOEIC はこのような役目を果たしている以上に、学生の学習意欲を高めるためのインセンティブとしても非常に大きな役割を持っています。470以上のスコアをとると基礎英語を受講する必要がなくなり、早めその先の科目である発展英語を履修できるという、こういうシステムが学生の学習意欲を刺激しているのではないかと思います。

さらに TOEIC で自分の英語力を客観的に把握する、そのうえで卒業までに自分はどのくらいの点数を目指してどのような勉強を進めていこうかということも学生自身に考えさせるというかたちで、学習意欲を引き出すことをねらっています。

このように TOEIC を導入して、共通英語の一部を TOEIC 対策にあてるというやりかたは共通英語の授業を活性化させるうえでも大きな役割を果たしていると思います。90分間

ずっとリーディングの授業だとどうしても単調で間延びしたものになりがちですが、このように授業時間を 30 分と 60 分の 2 つに区切ることでメリハリがうまれて、授業効果もアップしているように思われます。

学生にアンケートをしますと、「授業が 2 つに分かれていて退屈しないで緊張感をもって臨めた」と書いてくる学生がたくさんいます。

なお約 30 分の TOEIC 対策用リスニング指導ですが、リスニング用テキストについては CD が付いているものを使って学生に自宅学習を促し、教室での 30 分というのは自宅学習の確認作業に使ってほしいと担当者をお願いしています。

なお、共通英語のほぼ終わり頃に TOEIC 試験があるわけですが、共通英語の成績評価に関しては TOEIC の成績を加味するという事はしていません。共通英語は各授業担当者が自分の選んだテキストで授業を行い、独自の問題を作って成績評価を行っています。

次に基礎英語です。先ほど言いましたように、7 月の TOEIC で 470 点に達しなかった学生は 2 学期にこの基礎英語を履修することになります。週 1 回 1 単位の授業で、英語の基礎的な力を強化・充実させる授業です。基礎英語も学部別で、TOEIC のスコアに応じてクラス分けを行っています。授業の組み立て、内容は共通英語とほぼ同じです。日本人教員が担当する、読解力の養成を中心にした授業で、授業の一部はリスニングの指導にあてることになっています。

この基礎英語の単位を取得していることが、その次の発展英語を履修するための要件となります。クラスサイズは学部によって多少違いはあるんですが、大体 40 人としています。

次に 3 つめの科目の発展英語に移ります。基礎英語の単位を取得した学生、つまり TOEIC で単位を認定された学生、あるいは実際に授業を履修して単位を取得した学生は、次に発展英語を受講することになります。TOEIC で 470 以上だった学生は 1 年次の 2 学期にこの科目を履修することになりますし、逆に 470 点に達しなかった学生は 1 年次の 2 学期に基礎英語を受講して、2 年次の 1 学期にこの科目を履修することになります。

この発展英語は習熟度別クラス編成は行っていません。ただ全体として 2 学期に開講される発展英語のほうは TOEIC で 470 点以上とった学生が主に受講しますので、1 学期に開講される発展英語よりもややレベルが高くなっていると言えます。

この発展英語、担当するのはほとんどがネイティブです。授業内容も英会話中心の授業になります。実践的な英語能力、コミュニケーション力の養成を目指した科目です。やはり学部別に行われており、1 クラスの定員は 20 名です。こちらの方は定員を少なくしており、また担当者には宿題をたっぷり課すようお願いしていることもあり、週 1 回の授業ですが 2 単位を与えています。

新潟大学では多くの学部が全学英语の卒業要件単位を 4 単位としています。そのため、共通英語で 1 単位、基礎英語で 1 単位、発展英語で 2 単位、合計 4 単位、これで卒業要件を満たすこととなります。学部によっては卒業要件を 6 単位に設定しているところもありますが、その説明は割愛させていただきます。

卒業要件単位を全て満たしてしまっただけでも、もっと英語を勉強したいという学生には発展英語をさらに2コマ4単位まで受講することを認めております。

次に「応用英語」という科目に移ります。この応用英語は発展英語をすでにとっていて、かつ、TOEIC730点以上相当の英語力のある学生を対象にした上級のクラスです。定員は15人、全て外国人教員が担当し、英語の実践的な応用能力の養成を図るための科目です。

週1回2単位です。この応用英語は必修ではないので開講しているコマ数は少なく、前期に4コマ、後期に6コマ、合わせて10コマです。ネイティブが担当する英会話が中心の科目ですが、中にはパブリック・スピーキングとかディベートの指導を行っているクラスもあります。

応用英語に関しては、受講数に制限を設けず、意欲のある学生には何コマ、何単位でも積み重ねて履修することが出来るようになっています。

新潟大学では以上の4種類の全学英语がありますが、その他に、「理工英語読解」という理学部・工学部向けの科目があります。この科目は全学英语と学部英語の中間に位置しているものですが、これについての説明も省かせていただきます。

最後にまとめですが、新潟大学の全学英语は、高校から学部専門教育への接続を特に重視している共通英語、基礎英語などの読解力を中心とした科目、それから実践力を重視した発展英語、応用英語の2種類に分けることができます。

ただ共通英語、基礎英語などのクラスでも授業時間の一部はリスニングの指導にあてています。高校での英語教育との接続という点から考えますと、昨年センター試験でリスニング試験が導入されましたが、現在高校で行っているリスニング指導をきちんと引き継いで1年次の間リスニング指導を絶やさないようにして、さらに力をつけさせて発展英語、応用英語と結びつけていくという意味でもこれは意義のあることだと考えております。

新潟大学では平成16年度から独立法人化されるという際に、主に財政的な理由から非常勤講師の大幅削減が余儀なくされました。そのため全学英语でも開講コマ数をかなり削減せざるを得ませんでした。そのような厳しい状況の中で、「学生の英語力をもっと高めるように改革せよ」という学内的に強い要請があり、困難な課題を背負わされました。しかし、以上のように習熟度別にクラス編成をしてクラス内の英語力を平準化する、またTOEICを導入して学生の意欲を高める、また統一副教材を作成して到達目標を示すという一連の改革を行うことで一定の成果を上げてきているのかなと感じています。今後もさらなる改革、改善を続けていかなければならないと考えています。このシンポジウムもそうした努力の一環だにご理解いただければ幸いです。以上です。

## 新潟大学全学英語カリキュラムに関する学生アンケート報告（平野講師）

平野と申します。人文学部を主に担当していますが、昨年 7 月末に発足しました全学教育機構英語教育企画開発室の代表もつとめております。どうぞよろしくお願いたします。

本学では平成 17 年度から全学英語教育カリキュラムを大きく改訂したことは、ただいまの恩田先生のお話にもあったとおりですが、それについて学生の意見を聞き、更なる改善へとつなげていくために、初年度の第 2 学期の終わりに、全学英語科目を履修した 1 年生を対象にアンケートを行いました。その際の質問用紙は 1 枚目の資料としてお手元にごさいます。これからその結果について、簡単にではありますが、ご報告させていただきます。

アンケート結果は各学部（一部は学科）別にも集計したのですが、ここでは全学的な結果のみ取り上げたいと存じます。2 枚目の資料がそれですが、さらに質問(1)の回答に基づき、17 年 7 月に実施された TOEIC IP のスコアが 470 以上の学生と未満の学生とで分けてみました。その結果は 3 枚目と 4 枚目の資料に示してあります。

それではまず、質問(2)の「共通英語が習熟度別クラス編成になっていて、受講しやすかった」かについて。恩田先生のご報告にもありましたように、共通英語の授業では、入学試験の結果等を利用して習熟度別クラス編成を行っているのですが、肯定・保留・否定の 3 つの分類でパーセンテージを申し上げますと、全体では、肯定 59%、保留 30%、否定 11% となっており、半数以上の学生が受講しやすかったと答えています。この結果は TOEIC スコア別分類でも、ほとんど変わりません。というわけで、習熟度別クラス編成——実を言うところ、このクラス分けの作業はととても大変なのですが——には苦勞しただけの甲斐があったと言えそうです。

質問(3)から(6)はいずれも TOEIC 関係の質問となっております。まず質問(3)の「共通英語が TOEIC 対策（リスニング）と読解力養成の 2 本立てになっているのはよかった」ですが、これも先ほど説明がありましたように、共通英語の授業では一定の時間を割いて TOEIC のリスニング問題演習を行なっているのですが、この質問に対する全体の回答結果は、肯定 52%、保留 31%、否定 17% でした。肯定つまり TOEIC リスニング対策に時間を割いてよかったと思う学生が過半数に達しております。TOEIC スコア別分類に目を転じてみても大勢は変わらないのですが、470 以上では肯定の割合が高く、470 未満では保留が多くなっています。これは、質問(4)から(6)についても同じことが言えるのですが、成績がよかった学生は肯定的評価に傾き、芳しくなかった学生は否定的評価に傾くという、いわば当然の反応と言えるでしょう。

質問(4)「共通英語の TOEIC 対策（リスニング）の時間はもっと増やした方がいいと思う」、質問(5)「TOEIC を受験してよかったと思う」、質問(6)「TOEIC をもう一度受験してみたい」についても、肯定がおおむね過半数を超えていますので詳細は割愛させていただきますが、総じて学生は TOEIC を受験してよかったと思っている——少なくとも否定的な意見の持ち主は少数派だったことが見て取れるかと思えます。

質問(7)から(9)は、先ほども話に出ました「新潟大学統一英語副教材」に関する設問です。まず質問(7)の『統一副教材』は共通英語の授業で活用されていた」についてですが、残念ながら全体の結果は、否定が一番多くて 52%、次に肯定で 29%、保留は 18%でした。TOEIC スコア別分類を見ても、結果に大きな違いはありません。

しかしこれは、教材のレベルが不適切だったからではないようです。というのも、質問(8)「『副教材』のレベルは適切でしたか」の質問に対しては、いずれの分類でも「ちょうどよかった」がほぼ 7 割を占めているからです。にもかかわらず、質問(9)「『副教材』は英語学習や TOEIC 受験の役にたった」の結果——全体で、肯定 20%、保留 26%、否定 54%——にも見られるように、あまり活用されているとは言えない……

個人的な見解ですが、これには大きく 2 つの理由があると思います。一つは、副教材の体裁があまりユーザーフレンドリーでないこと。もう一つは、教える側の先生方に副教材の使用法が十分浸透していない可能性があることです。前者の欠点は今後の改訂において工夫すればよいことですが、後者に関して言いますと、この副教材は、よくご覧になっていただければお分かりになるように、特に文法のパートに新機軸を多く盛り込んであるものですから、教授法の開発を個々の先生方に任せきりするのは合理的でないと思います。それよりはむしろ集团的に問題の解決に当たるべきで、つまり FD を実施したり、教授用マニュアルを作成したりといった作業にもっと力を注ぐ必要があるでしょう。副教材については以上です。

質問(10)は、現在、本学の英語教育カリキュラムへの大規模な導入を検討しております CALL (コンピュータ支援語学学習) 教材についての設問です。実は去年、2 種類の CALL 教材——千葉大の先生が中心となって開発した Listen to Me! という CD-ROM 型教材と、市販のネットワーク型教材であるアルク NetAcademy——を使って 3 つのクラスで試行的に授業を行いました。しかしそのことについては、学生には積極的に宣伝しませんでした。なので、CALL の具体的内容についてはほとんど知らなかったはずなのですが、にもかかわらず、半数以上の学生が興味があると答えています。いかにも今の学生ならではの結果ですが、子細に見ますと、TOEIC スコア 470 以上の方が 470 未満に比べ肯定の割合が高く、その逆に 470 未満の方が 470 以上よりも否定の割合がやや高くなっています。が、これは英語学習に対するモチベーションの差の現れでしょう。

最後の質問(11)は「英語の必修単位は、どうすべきだと思いますか」というものです。先ほどの説明にもありましたように、本学の標準的な全学英语の必修科目数・単位数は 3 コマ 4 単位なのですが、これは従来に比べるとかなり減っていることになります。もちろん今の 1 年生は、以前どうだったかということは知らないわけですが、実感としてどのように感じているかを知るために、このような質問をしてみたわけです。結果は、全体では「大幅に」ないしは「少し増やす」が 20%、「今のままでよい」が 59%、「少し減らす」は 11%、「必修ではなく選択にする」が 9%でした。大半が「今のままでよい」と答えているのですが、これも詳しく見ますと、TOEIC スコア 470 以上では「増やす」が 32%とかなり多く、

「減らす」ないし「選択」がわずか9%なのに対し、470未満では「増やす」は16%と470以上の半分に留まり、「減らす」ないし「選択」は25%と470以上の3倍近くの割合になっております。これも TOEIC や CALL の場合と同様、英語学習に対する意欲の違いによるのでしょう。

今、現状維持という回答が6割を占めたと申しましたが、もちろん我々英語教員としては、それが望ましい状態であると考えているわけではありません。できることならば意欲のある学生には思う存分、そして苦手な学生には否が応でもたっぷり、十分なコマ数の授業を受けさせてあげたい……しかし諸般の事情でそれが叶わないものですから、教員側ではFDを実施して優れた授業方法を共有しようとしたり、独自テキスト——副教材はその一例ですが、他にもプロジェクトが進行中です——の開発を通じて、個々の授業の充実度の向上を図ると共に、CALLを始めとする、従来型の授業を補完する新たな教育方法を模索しているところなのです。

以上で私の報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

## 第二部

### 新潟大学の入学試験と高等学校の英語教育（萩野講師）

みなさんこんばんは。新潟南高校の萩野と申します。毎年新潟大学に卒業生が大変お世話になっています。ありがとうございます。

私は現在3年生の10クラスの学年主任をしております、この時期高校の現場で働いていらっしゃる方はもちろん、大学の先生方もご存知の通り、今は非常に大変な時期であります。

さて、本題に入らせていただきます。

お手元の資料をご覧ください。これから申し上げますことはあくまで私見です。まず全体的なことをお話しさせていただきます。まず新潟大学の英語入試問題ここ数年の傾向がありますが、資料に記載の通り、このようなかたちになっています。

ここにお集まりの先生方に、一応思い起こしていただくために、昨年の問題についてちょっと振り返ってみたいと思います。Ⅰ、長文問題ですけれどもこれは、オックスフォード大学に入ってくる学生の年齢制限ということで13歳14歳の学生を受け入れていたわけですが、その体制がおそらく終わるだろうという話でした。14歳の中国人イーナン・ワン君がそのオックスフォードで学ぶ最後の14歳の天才児になると思われる、というそんな話でした。

下線部訳が2つ、それから内容に関して字数制限ありで説明を求める問題が1つと、あともう1つありました。ルース・フローレンスとイーナン・ワン君の相違点を日本語で80字以内で述べなさいというものです。

Ⅱも同じく長文問題で広告に関する話です。広告というのは一般的におまけのようなものとみなされている、そういう意味で広告というのは実はたくさんあるけれど人の目に入っているようで入っていない。しかし広告に対する考え方を聞けば、その人の性格とか、社会的地位、思想傾向がかなり分かるという、広告に関するひとつの考察が述べられた文章でした。

そういう内容の長文問題で、やはり下線部和訳が2題、60字と70字での字数制限を設けた内容説明の問題が2題ありました。

そしてⅢは英作文問題です。和文英訳です。日本語が与えられていまして、一部下線がひかれていまして、そこを英訳するという問題です。たとえば、こんな日本語に下線がひかれてありました。「レストランで食事中にフォークやスプーン他のものを床に落としても拾い上げてはいけません」。あるいは2番ですとこういう下線部です。「勉強意欲に燃えてやってきた留学生となんとなく大学に入学した日本人学生を比較しても仕方ないだろう」。そういう日本語を英訳しなさいということです。

そして、Ⅳはリスニングテストですが、これは教育人間科学部学校教育課程英語教育専修のみの出題です。

さて、レジュメの 2 番ですが、全体を通して、普段の高校の授業に真面目にとりくんで、こつこつと復習と積み重ねている生徒にとってはそれほど難しいと感じる問題ではないと思います。文量も適切、真面目な生徒が報われるという良問であろうといえます。ただしここでいう高校というのはいわゆる進学校の高校のことです。これだけお断り申し上げておきます。

次に、レジュメ 3 の「長文問題について」ですが、ここでは(3)と(4)を補足します。(3)は下線部和訳についてです。語彙面や、文法、構文面での理解ができれば前後関係の理解は不要だと思います。下線部の英文単独の理解のみで正解が得られます。実際新潟大学の受験を終えて、帰ってくる生徒に質問しますと、「先生、英語の長文が何いってるかさっぱりわからなかった」と言ってくる。でも受かるんですね。「よかったね、あなたは英語は失敗したけど、他の教科でとれたんだよ」と言ってます。でも、生徒は言います。「でもね先生、下線部の和訳は完璧だったよ。」……

そして(4)ですが、さきほど 60 字、70 字といいましたが、具体的に述べなさいという問題も、他大学に比べれば比較的平易であると思います。下線がひかれてある該当箇所の近辺を読み取れば答えられる。ここらへんは他の大学とくらべても大同小異のところがありますが、ただし理解したことを簡潔にまとめる表現力が必要なんです。今の高校生はこういうのが非常に弱いと思います。英文を日本語に訳すのはできるんです。しかし、ここで作者が言っていることをまとめてごらん、と言うとまとめられないです。「読み取った内容を自分のことばでまとめてごらん」と言っても、できない。全然まとめられないんです。まず黙ってしまう。そういう表現力の不足というのが大きな問題であると思ひまして、その表現力を伸ばすための指導が私たちにとって大切なのではないかと、今、自戒を込めて痛切に感じます。今も申し上げましたが、「読み取った内容を自分の言葉でまとめなさい」というのは、まずきちんと段階を踏んで訓練しないとできないです。ですから 60、70 字でまとめなさい、というのが新潟大学で出ますが、言いたいことは生徒は頭にあるんでしょうが、それを実際に文章で書けない、言いたいことを的確に相手に伝える文章で書けないというところがあります。

あと、レジュメの 4 番の英作文と 5 番のリスニングについてはお読みください。次のページに行きます。Ⅱ番として「個々の具体的なこと」とありますが、これも生徒が実際聞いてきました。「It ってちゃんと具体的に日本語に訳して書くんですか」と聞かれました。新潟大学の問題は、ただ和訳しなさい、ということですね。「(a)を和訳しなさい」、ただそれだけです。

“We have been pushed to consider it.”ここに it があるわけですね。いわゆる赤本の解答はこうなっています。「私たちがそのことを検討せざるをえなくなったのは……」つまり、この it というのは具体的に和訳しなくていいのかということですね。生徒は迷います。と



というのはレジュメの①のように、我々は高校の現場の指導としては、代名詞があればそのさす内容を明示させて和訳させるのが一般的なのではないでしょうか。私は、一般的にはそれが望ましいと考えております。授業も、「これを訳してごらん、『それは……』のそれって何ですか」と必ず聞きます。

②です。ただし、試験の場合、設問の指示に、「it のさす内容を明示して」、という文言がなければ、it のさすものを明示する必要はないわけです。

ですから①、②の指導を、特に①ですが、このような指導や評価に慣れてきている生徒はこのような新潟大学の問題の指示にあたったときはどう反応するだろう、と考えるところです。一生懸命 it が何をさすかを考えて訳す生徒もいるでしょう。時間が5分たち10分たち、一生懸命訳して、気がつけば時間が無かった、ということが多分あると思います。

次、レジュメの(2)です。この Ruth Lawrence と Yinan Wang です。設問は「Ruth Lawrence と Yinan Wang の相違を、句読点を含め80字以内で具体的に述べなさい」というものですが、人名はどのように答案用紙に書けばいいのでしょうか。そのまま綴ればいいのか、その際の字数のカウントはどうなるのか、それとも「ローレンス」、「ワン」とカタカナで記入すべきなのでしょう。もしこういうふうにはカタカナで記入するとしたら、やはり人名というのをどのようにカタカナで起こして書くか、ということが生徒にとってはかなり難しいんじゃないかと思います。できれば脚注を施すなど、何らかの工夫が必要なのではないかと思います。

レジュメ2番ですが、これはお読みください。3番もお読みください。

4番です。リスニング問題は私は非常に評価しています。もう少し全体の量を多くして、試験時間もたっぷりって実施してもいいと思います。

結局私が言いたいのはこれです。レジュメのⅢをご覧ください。要するに、新潟大学の入試問題は非常にオーソドックスです。よく言えば安定感があって標準的。悪く言えばおもしろくないのです。たしかに英文和訳や和文英訳をさせて、いろんな意味での受験生の基礎力を計ろうというのは良く分かります。私自身、英文和訳や和文英訳そのものを否定する人間ではありません。しかしその傾向が強すぎる。まあ徹底しているという言い方もありますが、そういう気がします。

そして、改めて申し上げますが、大学入試問題が高校現場に与える影響は大きいです。新潟大学の入試問題が変わったらすごいことです。レベルが上がったらどうするか。特に我々のような学校は。もっとガリガリに生徒に勉強させるでしょう。逆にレベルが下がったらどうでしょう。もっと余裕をもって指導できるでしょうか。さあ、これはまた別の話になってきて、また別の議論ができそうですので、ここでは深入りしません。そして(2)です。問題の形式が変わったらどうか。早速分析して対応策を練るでしょう。校内でも全県規模でも。いずれにせよ大学入試問題が現場に与える影響は大きいです。

それを承知で提言を2つ申し上げます。1つはもっとコミュニケーション的な問題も加えたらどうか、と思います。例えば、日本語でもいいので文章を読ませて、それを英文で要約さ

せて、さらに内容に関する自分の意見を英文で書かせる、ということ。あるいは、英語の長文を読ませ、読み取った内容を図表やグラフにまとめさせるという、いわゆるインフォメーション・トランスファーというのがありますが、そのような問題もできるのではないかと思います。

ご承知のように、こことは違いますが、東北大の英語入試問題は去年から変わりました。生徒は何人も東北大学を受けますが、「先生どうなるんでしょう」「あれは続くんでしょうか」と聞いてきます。我々も対策を練って指導します。私の母校でもありますが、よく変えてくれたな、さすがだなと、思いました。高く評価しています。

2点目の提言です。リスニングテストをより充実したかたちで実施してもらいたい。なぜ新潟大学はリスニングテストを全学規模で実施しないのか。また、年度によって実施する学部がころころ変わるのはなぜか。新潟大学のリスニングテストは、よく練られていて非常に良いものだと思います。私はとても高く評価しています。十分に時間をかけてリスニングテストを行うのは私はすごくいいと思います。

なぜこういった提案をするか。それによって英語教育の現場が、われわれが活性化するという事です。入試が現場を変えます。現場も入試を変えるでしょうか。

今後の高大接続のさらなる発展を大いに期待しております。

以上です。ありがとうございました。

## 大学生に望む英語力——文系教員の立場から（高橋講師）

人文学部英米文化履修コースの高橋です。2週間前にスキーに行きましたが、余りにもスキー場が寒くて風邪をひきました。少し咳がでますが、ご勘弁ください。

私のテーマは「大学生に望む英語力」とありますが、大学生、そして大学に入ってくる高校生にどのような英語力を望むかというのを掻い摘んでお話ししようと思います。

私は英米文化履修コースに所属しているわけですが、そこで学生が何を学んでいるかというと、ハンドアウトにありますように、英米の文化、英語学、実践的な英語の3つであります。

私は英米の文化のうち、イギリス文学を担当しています。我々のコースが学生に対して要求するのは、やはり皆さんが先ほどから言っていますように、特に読む力です。我々が学生に要求するのは英語を読む力です。皆さんも充分ご承知のことと思うのですが、英語を読む力がないとこの英米文化履修コースではやっていけないということです。最近では英米の文学や文化や英語学の原典が日本語に訳されていたり、研究書も日本語に訳されていたりしますので、学生は原典を英語で読む必要がないかもしれません。4年生の卒論をみると、日本語で作品を読んで、日本語で書かれた研究書を読んで、日本語で卒論を書く、という学生もなかには見られます。しかしそういった学生が書く卒論はたかが知れているところで、良くもなく悪くもなく、平凡な内容になってしまいます。

私どもとしては、英米文化を学ぶ学生には読む力を身につけてきてほしいと切に願っているところです。大学生、高校生に関しては英語の実用的なコミュニケーションに対する要求が強いところがあります。我々人文学部の英米文化履修コースに実践的な英語学習が全くないかと言えましょうそになりますが、ただそういった実用的な英語をテーマにして学生が卒論を書くということはありません。自分で原典を読んで、批判的な力を向上させて、なおかつ自分の考えを自分の言葉で表現するという——これが我々が一番学生に要求するところです。この点については地域文化課程の他の先生方もほぼ同じような考えをもっていると思います。そういう意味で外国語の原典、文献を読んで理解をするという、これは最も基本的な作業ですが、そういった力を私は個人的に重視したいと常々思っています。繰り返しになりますが私どものところでは、英語の原典を読んで、なおかつ英語の文献を読み、それを自分なりに批判をしながらまとめていく作業を通して最終的に学生は卒論を完成していくわけです。そういう意味で英語を読む力というのはいくら強調しても強調しすぎることはありません。

では、どうしたらそういう読解力をつけることができるのでしょうか。これは私の経験から言いますと、多読によります。私は多読によってある程度の英語の力がつくと思っています。毎年新学期、教養英語の最初の時間に、私は学生に、英語を読む分量を増やせば必ず英語の力はつくと言っています。高校時代は短い文章しか読まないで、英語の力は十分でないかもしれないが、多く読めば読む力は必ず向上すると口をすっぱくして学生に

言っています。多読によって英文の構造が分かってきます。それからまた文法も分かってきます。そういう意味で、多読は大いに薦めたいと思っています。私は大学2、3年のとき、英語の小説をいっぱい読んだ記憶があるのですが、知らず知らずのうちに読解力や文法の力がついていったのもその頃が多読のおかげだと思っています。

それからもうひとつ英語力の他に、土台となる日本語の表現力も必要なことで、これは非常に重要だと思っています。日本語の表現力は幅広い いろいろな読書を通して身につくものでしょう。最近の学生は新聞も雑誌も読まず、メールや携帯でしか情報を仕入れてこないところがあります。なかには情報を仕入れてくることはうまいが、それを批判することができない学生もよく見かけます。英米文化履修コースの科目ではないのですが、「総合演習」という人文学部の1年生向けの授業がありますが、私は毎年学生に自分で選んだテーマについて発表させています。それを見ていると先ほども言いましたが、学生は情報を集めるのは非常にうまい。パソコンを使っていろいろな情報をもってきます。ただ残念なのは紹介だけで終わってしまい、自分の考えが出てこない。それはどうしてなのかと思っているのですが、この傾向は毎年強くなってきています。

思うに卒論を見ていると、日本語で書く文章力が弱い学生がいます。私はそのような学生は英語の力もそれほど高くはないのではないかと思っています。ですから英語力、それに日本語の表現力が我々のコースでは必要なわけです。卒業後いろんな場面で学生は意見を求められるわけですが、そういう意味でも日本語の表現力は非常に重要です。

ちなみに英米文化履修コースの卒業生の進路ですが、教員とか公務員とか、あとは民間会社とか——大学院進学もありますが、ほとんどは民間会社に就職をしています。英語を使う仕事に就く人は多くはありません。しかし、英語を読む力が自分の思考力を鍛えていく、そして最終的には人間として的人格形成がなされていきます。そういった知的な訓練を積むためにも、私は学生に英語の読解力を身につけてほしいと思っているし、私たちのコースの学生にもそれを求めているわけです。

簡単ですが、これで私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 大学生に望む英語力——理系教員の立場から（松尾講師）

理学部の松尾と申します。与えられたタイトルは、「大学生に望む英語力——理系教員の立場から」ということです。

まず、理系では非常に英語が重要ですが、その事情からお話しします。学生の進路を資料に示したのでそれを見ていただきたいのですが、現在この理学部で言いますと、学部で卒業する学生よりは、修士課程に進む学生の方が多いのが実状です。60%ほどが修士課程に進学しまして、そのうちの10%以上が博士課程に行くわけです。したがって、修士課程進学者がメジャーな部分となり、そのうち大部分がいわゆる理系的な職業、専門的な職種に就くわけです。いわゆるエンジニアが多い。もちろん学部卒で専門的エンジニアに就職する人もいますし、修士から別の、理系とは限らない分野に進む学生もいます。

それで我々としては、メジャーな部分、エンジニア等の部分、これをターゲットに考えることになります。この場合、道具としての英語であり、実際、職業上必要になる可能性がかなり高いと考えています。一方、博士課程に進学しますと、英語は必須のコミュニケーション手段となります。当然、このことも念頭に置いています。

修士課程卒でやや専門的な理系職種に就く学生に対して、私は次のようなイメージを持っています。現代の技術系企業というのは外国取引がきわめて多くて、外国に工場があるのはあたりまえです。そうなると技術資料などやりとりするときに英語が使われる。当然技術資料は英語ですから、それを調べるということが充分考えられるわけです。

企業の方々にお聞きしますと、企業でも技術者向けの英語教育をやっている、TOEICを使っているというところが結構多い。全員が英語を必要とする職種に就くわけではないのですが、こういった可能性が極めて高いということで、我々はそれを意識しています。

ということは何を意味するかというと、学部や修士課程の在学中に、専門分野に関する実践的な英語の経験を積む、ある程度経験しておくことが必須であろうと考えています。特に、実体験のなかで使うことが重要と考えています。実体験ということで我々が提供できるのは、実質的には大学院の修士課程教育と考えてもらって結構です。

我々理学部の教員は大学院での指導の一環として英語教育を行います。英語を指導することが教育の主目的ではないのですが、教育研究と不可分になっています。具体的には、英語論文の輪講を通しての読解指導、英語論文の執筆指導、英語での発表指導などです。大学入学から4年後にはこの水準にスムーズに接続してもらう必要がありますから、学部の2~4年の段階での英語教育を自分たちでもやっています。もちろん、学部卒でもコミュニケーション手段としての英語をある程度は身につけてほしいという意図もあります。

理学部での英語教育——新潟大学では学部が中心となって実施する英語教育のことを1、2年次に行く「全学英语」と区別して「学部英語」と言いますが、理学部の学部英語は現在はおおよそ以下のような感じで実施しています。まず挙げられるのが、4年次の卒業研究を指導するなかで実施する英語指導でしょう。これは上記の大学院での指導の一部先取りの

ような感じでしょうか。ただ、それだけでは不十分で、2年あるいは3年次でも専門英語を経験させるような授業を2単位ぐらいで各学科で実施しています。教科書や論文の読解指導や輪講などですが、これで卒業研究で使えるくらいまで引き上げることを目指して実施しています。

学部段階で必要な英語のレベルとしては、世界の各大学でも使われているような理系教科書（英語で書かれた大学教科書）を読めるという水準と考えています。英語で書かれているホームページを見たことがあるとか、研究室に訪問してくる外国人研究者や留学生に怖じ気づかないくらいの程度といってもいいかも知れません。

一番大事なのが修士課程と考えていますが、そこで必要なレベルとしては、次のような感じでしょうか。まず、研究資料や学術論文は、2～3冊の英語で書かれている専門書や10数編ぐらいの英語の論文は読んでほしい。読解以外では、外国人研究者と話ができるとか、英語による一般的講演を聞いて概略をつかめる、あるいは国内開催の国際研究集会に出席し、ポスター展示による英語発表ができるレベル。あるいは、英単語でgoogleできる、などでしょうか。これらが、先ほど述べました実践的な英語体験と考えています。このぐらいできると社会に出てもなんとかなるのではないかと考えています。

実例をお見せします。ひとつは、大学院入試（物理学分野）の英語問題です。お手元に資料がありますので、ご覧ください。この程度の英語がある程度読めればいいかな、と思っています。これは、教員がよく読んでいる専門書のレベルです。他の例は、アメリカとか世界でよく使われている生物学の教科書です。これを理学部2年生程度の輪講に使っています。専門の内容としては、大学1～2年次の水準でそれほど難しくなく、英語の文法としても高校英語とそんなに大差ないと思っています。ただ、論理的な記述が多く、指導をして、ようやく前後の筋道を理解できるようになります。この水準の英語文章がなんとか読める、そして多少でも書けるというぐらいのレベルが、先ほど言いました、実際の職業関係で必要になる水準だと考えています。これは、実は別の目的で集めた資料でありまして、そのために理学部教員による解説がついています。この先生によると、これは非常に典型的なテキストだということですが、学生は結構つまずきます。どういう点が大事で、なぜ学生がつまずくかということが書かれています。英語そのものはそんなに難しくないので、これもやはり読んでいかないと理解できないということで、理学部としても各学科で指導をしているわけです。

最後に博士課程ですが、この段階では英語は本当に必須のコミュニケーション手段になります。ただ、時間がありませんので説明は省略させていただきます。

まとめます。理系大学生の多くは、大学院修士課程に進み、技術系の分野に就きます。博士課程に進学して研究職を目指す者や、学部卒もいるわけですが、主には将来技術系分野に就くことを私たちは想定します。この場合、論理的な文章が重要で、洗練された英語表現というのは必要ありません。例に挙げた程度の英語がなんとか使えこなせば充分で、それで論文も書けますし、それでコミュニケーションできれば充分だと考えております。

まあ、たぶん技術者が読む英語文章というのは、Windows の英語マニュアルとかですが、そのレベルを超えるということはありません。高校水準の英語なのだけれど、実践的体験を経なければ身につけませんし、それが非常に重要なのです。それを私たちはリーディングから入っています。というのは理学部内では、充分英語教育に時間をかけるほど体制ができていないので、ライティングやリスニングやスピーキングは大学院に入ってから、いきなりぶっつけ本番でやっているという感じです。

以上、理学部の状況を簡単に説明させていただきました。

## 大学生に望む英語力——理系教員の立場から（大河講師）

工学部の大河と申します。よろしくお願いいいたします。ひきつづき工学部の方からお話しさせていただきます。

工学部の英語教育は教養系科目と専門系科目の 2 つに大きく分かれています。教養系英語科目については工学部全学科共通です。英語に関して必要となる卒業要件単位は最低 2 単位ですが、7 割以上の学生が少なくとも 6 単位を取得しているようです。先ほど恩田先生からも説明がありましたが、教養系科目の英語は習熟度別クラスになっています。工学部の場合は 6 段階あるいは 7 段階にクラス分けされています。次に、専門系英語科目についてですが、各学科にはそれぞれ教育理念がありますので、その理念に従って科目設定されています。科目名、科目数は学科によって異なりますが、4 年次に開講される授業が多くなっています。

これは英語の授業の開講時期を表にまとめたものです（資料参照）。赤色の○印と△印が教養系英語の開講時期を表しています。○印の科目はすべての学生が受講し、単位を取得しなければなりません。△印の科目については必ずしも単位をとる必要はありません。ちなみに、○印と△印の教養系英語の単位をすべて取得すると、6 単位になります。一方、黄色の●印は専門系英語で、ほとんどの学科が 4 年次に授業を開講しています。この表を見ると分かるのですが、2 年次第 2 期から 3 年次第 2 期にかけて、英語の授業があまり開講されていません。これは、あまりいいことではないのですが、専門科目の修得に多くの時間を必要としますので、現状ではやむを得ないところであります。

次に、専門系英語の科目名を学科ごとに拾い出したものを紹介します。これを見れば、専門系英語科目でどのような英語を勉強しているのか、また工学部の教員が学生に何を期待しているか、ある程度つかめると思います。機械システム工学科では、「技術英会話」と「英文輪講」という科目が開講されており、名前のおり会話と読解に重点が置かれた授業のようです。電気電子工学科には、「技術英語」と「論文輪講」が開講されており、シラバスによると読解が中心のようです。情報工学科も同じく読解に重点が置かれています。

この他の学科（福祉人間工学科、科学システム工学科、建設学科、機能材料工学科）においても、基本的に読解が中心になっています。工学部においては、研究に必要な情報を文献（ほとんどが英語）から仕入れることが多いので、読解力は不可欠です。そのため、ご覧いただいたように、各学科とも読解力強化に重点が置かれています。また、工学部の教員は、英語教育に関しては素人ですので、読解以外の英語を教えることが難しいという事情もあります。

以上のとおり、専門系英語科目の特徴は、4 年次開講科目が多いこと、研究論文・記事等の読解が中心であることがお分かりいただけたかと思います。ところで、4 年生は研究室に配属されていますから、4 年次開講の英語科目のほとんどは研究室単位で実施されます。つまり、個々の教員に英語教育が任された状況となっています。これまで専門系英語科目は



読解が中心だと説明してきましたが、専門で重視される英語力は読解だけではなく、当然ながらリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングに関するバランスの取れた能力が理想です。とはいえ、まずは、技術的な文章を読む力と、できれば書く力を身につけてほしいと思っています。

では、工学部の学生にリスニング、スピーキング、ライティングの力が本当に必要なのかといいますと、全員とはいいませんが、かなりの数の学生が必要とします。これは、私の研究室の学生が過去 5 年間に国際会議で発表した一覧表です。毎年、国内外問わず、博士前期課程及び博士後期課程の学生が発表しています。ただ、英語による質疑応答は学生にとってかなり難しいので、ほとんどがポスター発表になっています。ところで、アメリカで開催される国際会議 **Photonics West** と **Optics East** では、10 ポイントの字で A4 判 8 ページの論文を書かなければなりません。学生に責任感と達成感をもってもらうため、独力で 8 ページの原稿を書かせます。8 ページもの原稿になると、実は手直しする労力も馬鹿になりません。実のところは、最初から自分で書く方が楽です。原稿作成のあと、学生は発表用のポスターを英語で作成します。さらに、ポスター発表ではありますが、発表原稿を作り、それを覚えます。これだけのことをやり終えて国際会議に臨むと、たどたどしい英語ながらどうにか対応できるようになります。海外での発表は、学生にとってはかなりハードルの高いものですが、いろいろと勉強になる部分も多く、学生の意識改革には非常に役立っているように思います。このように、工学部では、国際会議で学生が発表することが珍しいことではなくなっており、工学部生は、英語ができなくてもいいんだとは言えない状況になっています。また、就職後においても、企業の国際化により、技術者が直接海外の顧客と連絡を取り合うことは珍しいことではなくなっており、工学部生の英語力はますます必要不可欠なものになっています。

資料のタイトルに高校の英語に期待することなんて生意気に書いていますが、実際には大学でもやらないといけないことです。「理系の職業こそ英語が必要」というのは、工学部のある先生の意見をそのまま使わせてもらいました。理系の学生は英語を使う機会が少ないなんていうのは大きな誤解です。実際には英語は不可欠です。ぜひ理系志望の学生さんに、「工学部でも英語は必要なんだぞ」と指導してもらえればありがたいです。次に、あたりまえですが、「文法、語彙力などの基礎英語力」です。今日、高校の先生のお話を拝聴させていただきましたが、すごく一生懸命に教育されている様子が伺え、高校英語に期待することとして、こんなこと書かなければよかったと反省しているところです。4 番目に「論理的な英語力」と書きましたが、論理的に書かれた英文に親しんでおいてもらえるとありがたいです。最後に、先ほどもお話がありましたが、学生の国語力が不足しているように思われます。ただ、理系では、難しいことは要求されず、平易な言葉を使って論理的にまとまった文章を書ければ、それで十分です。理系志望の学生さんには、英語嫌い、国語嫌が多いのではないかと思います。工学研究者・技術者はただ単に研究や開発をするだけでなく、研究・開発の成果を内外に発信することも大事な仕事です。当然ながら、英語

力、国語力が重要となります。数学と理科に偏りがちな学生さんには、ぜひご指導の方よろしく願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

## 質疑応答

(新潟大学 小山洋司先生)

経済学部ロシア・東欧経済論担当教授の小山と申します。なぜここに来たかという、プログラムを見て高橋先生が、「大学生に望む英語力——文系教員の立場から」と書かれていまして、英文学の先生だけが文系を代表されるのは具合が悪いなと思いました。高橋先生のお話は貴重だと思いますが、文系の中には社会科学系もあり、これも忘れてもらっては困ると思ってわざわざ来たわけです。

意見と質問があります。私は英語の書物をかなり読まなければなりませんし、同時に英語を道具として使ってフィールドワークをやったり、国際会議で発表したりしています。僕らの分野は理科系と比べてかなり遅れていると思います。あまり英語で論文を書いたりしないし、国際会議に行かないわけです。それに比べて、理系の先生はしょっちゅう英語の論文を書き、どしどし国際会議へ行っているのです、われわれは遅れているなと思います。しかし社会科学の分野でも、近年は、ぼちぼち英語で論文を書く人も増えていきますし、国際会議にも行くようになっていきます。

それからわれわれの卒業生についてですが、企業へ行けば国際化時代ですから、嫌でも海外に派遣されたり英語で交渉しなければならなくなるというケースが増えると思います。公務員になった人たちも、自治体の国際交流により、英語を使う場面がますます多くなると思います。私は30数年教師をやっていて、在外研究に出かけたとき以外、毎年、英語の外書講読の授業も担当しています。そこで感じるのは、学生は一生懸命調べてきて、英語の文章が日本語になる。つまり横のものが縦になったらそれで終わり、万歳と思っているんですね。実はその逆も必要だと常々言いますが、それができていない。それから、彼らは日頃音読していない。授業では文章を訳す前に音読させますが、ひとつの文章を何度も立ち止まったりして読む学生がかなりいます。何をすると言いたくなります。

そこで思うのは、東欧諸国に行くと、現地の小学校の上級、あるいは中学生と話をする機会があるのですが、彼らは学校で教わったとおりに僕らに向かって喋ってきます。日本の学生はかなり難しい英語を読めるのだけど、あまり表現できない。しかし、読む能力と発信する能力に関して、外国の子どもたちは、かなりその差が少ないように思えます。そんなに難しい文章は読めないんだろうけど、でもそのレベルで喋ってきます。どこか教え方に違いがあるのではないかなという気がします。

それと僕が強調したいのは、英語を読んで自分の知らない知識を得るというのも大事だけど、自分の考え、感情を英語で表現し、そして、それが相手に伝わる、ということはずごく大事なことはないかと思います。これが喜びとなり、もっと勉強しようと思うのではないかと思うんです。そういうことを言っても、それは中学のレベルの話であって、高校では大学入試が近いから、それどころじゃないと言われるかもしれませんが。

お話を聞いていると、モチベーションのことがあまり話されなかった気がしました。大学では TOEIC の関係でモチベーションについて言われました。高校でモチベーションと言えば、一生懸命英語を勉強しなければいい大学に入れないよ、というだけでしょうか。先ほどの高校の先生のお話でも、ガリガリ追い込んで勉強させると言われていまして、高校の先生も大変だなと思いました。高校生もいったい何がおもしろくて勉強するのかなと思いました。ここがすごく疑問なので、モチベーションのことをどう考えるのか、ご意見を聞きたいと思います。

(萩野講師)

モチベーションをどう捉えて生徒に英語学習への動機を持たせるかということですが、まずひとつ、高校によります。いろんな生徒にもよるでしょうし、高校にもよるでしょうし、一概にはいえない。

ただ私の限られた経験のなかで申し上げれば、確かに大学入試というのが大きなモチベーションのひとつになっています。あとはやはり、分からないことが分かるようになることの楽しみ、難しいものが分かるようになる楽しみ。そういう「学び」の根源的なものがあると思います。たまたまそれが英語であるというだけで、勉強をする楽しみというのが、英語についても言えるということです。

さらに、英語を通して、英語に触れて英語を使うことで、英語が分かる、また、英語が使えると世界が広がる、視野が広がっていく、その喜びというものもひとつの大きなモチベーションになると思います。

あるいはまた、「英語は役に立つ」ということを実感させる、これも大きなモチベーションだと思います。

ですから、誤解していただきたいのが、たまたま大学入試というのがあるだけの話で、それがどういう学校でも、どういう教師でも、どういう事情でも、それだけが生徒に英語を勉強させるモチベーションだということは決してないです。ひとつの大きなモチベーションなのは確かですが、それはオンリーワンではないです。以上です。

(永村講師)

やはりモチベーションを生徒がもつためには、中学生時代英語ができて、高校に入ってきてそこでぐしゃっとつぶれるとダメですね。どうしてなのかというと、やっぱり中学校英語はうすっぺらなので、ある程度英語のインプットの量が高まってこないモチベーションも生まれにくい、というのが私今回 3 年間で思った一番大きいところなんです。

表現力の話が出ましたが、私の資料 2 の教材の 3 年生 1 月の欄に、『伝わる英語表現法』とありますが、これは岩波新書で、読まれている方もいらっしゃると思いますが、この段階で初めて英語で表現することのおもしろさを味わう生徒が多くいます。

「私の息子がこの春社会人になった。」“My son became a member of the society this

spring.”——さあ、この英語は化け物英語だが、その正体を暴け、と言うと誰もわからない。これはひょっとしたら、刑務所など入っていったん人権を奪われた息子が、ようやくこの春釈放され、再び人権を与えられたのかな、と。生徒は文法も単語も全部正解なのに、びっくりします。伝わる英語表現としては、“**My son began to work after graduating from school this spring.**”である。これが伝わる英語表現なのだと気づかされる。もう生徒は和文英訳にとどまらず自由英作文もおもしろくてしょうがない。ここまでくると、小山先生がおっしゃいましたように英語で表現したいというモチベーションの方が読むことに対するモチベーションより高まってきます。

それじゃこういうことを1年生のときからやればいけないかと思う。しかし1年生の段階ではインプットの量が不足で、同じことを教師が言っても何を言っているのかわからないわけです。だからモチベーションというのは、ある程度のインプットの量とタスクを与えるタイミングというのが非常に大事になってくると考えます。そこからさらに進めて、わかることの喜び、できるようになるという喜びに、ひとたび何かグッと心を打たれると、もう生徒はめっちゃくちゃ勉強します。

巻高校は一人の人間が文武両道ということでやっています。学校が文武両道ではなくて、一人の人間が文武両道という生徒が多くいるので、ひとたび喜びや達成感を味わうと、パワーがありますので自分ですごくやります。以上は知的達成感の喜びという観点からでした。

一方、英語は好きだけれど、3年生のときの長文を読まされたのはきつくて、きつくて、なかなか英語ができないけども……、嫌いだけれど好きという心境わかりますでしょうか。巻高校で、英語は不得意だけれども好きなので、歯科衛生士になったら国際会議に出られるような人になりたいと言って、歯科衛生士学校に受かったときから英語を勉強しなおし始めている女子生徒がいます。このケースは、漠然としたモチベーションは備わっているが、指導と学習がマッチングしなかった例です。この子の所属する部活もなかなか熱心な部活で、学習量も伴わなかった面はありますが、引退後から3年生2学期にかけて学力は徐々に上がりました。自分の中でよくモチベーションを維持したケースです。

答えになったかどうかわかりませんが以上です。

(新潟高等学校 平山剛先生)

平山と申します。私は理系の生徒を相手している機会が多いので、ちょっとお時間いただいて申し上げたいのですけれども、私の担当している生徒で、新潟大学の工学部にお世話になりたいという生徒が結構おります。ただ残念ながら英語をあまり得意としておりません。ですので、もしなにかのご縁でお世話になることがありましたら、ひとつよろしくお願ひしたいと思うんですけれども、で、その理由はなぜかというふうに考えますと、英語は論理的である言語のはずなのに、英語は論理的でないと言っている彼らは言うんですね。なんで

だと聞くと、だって自分がそう理解した内容が赤本では違うし、先生が説明する内容ともちょっと違うようだ。ということで、自分の理解と、いわゆる入学試験の解答が違った場合に、まったく理解がつかないのでは興味をなくしてしまうという現実があるようなんです。それで、では彼らは何のために勉強しているかという、コミュニケーションをとりたいとか、将来学会で発表したいとかいう気持ちはさらさらありませんで、たんに大学に受かって、自分の好きな専門の数学、物理、化学、そういったものを研究したいという意思が強いようです。

ですので、もし新潟大学の先生方が、将来学会で発表する力を要求されたり、論理的な英語力を要求されたりするのであれば、私の私見ではありますが、学校でも英語の授業が増えたら——ネイティブによる授業も含みますけれども——英語でなされる専門の授業が少し増えれば生徒のほうも、よし、高校時代にしっかり勉強して新潟大学の工学部で英語を使って将来学会で発表するという気持ち、動機付けがなされるのではないかと考えております。

大学入試問題がすべてではありませんが、大学内で行われる英語の授業についても少し英語で行われる授業が増えれば、生徒の方も少し高校時代に英語で発表するという気持ちも芽生えてきて、ぜひ新潟大学で勉強したいという気持ちがより強くなるのではないかとこのように考えております。

(大河講師)

どうもありがとうございます。先ほど紹介しましたように工学部では、2年次第2期から3年次にかけて英語の授業が少なくなっています。英語の必要性を考えると、このような状況は望ましいとは言えないのですが、卒業要件の最低単位数が124単位と、昔に比べて少なくなっており、英語に多くの単位を割くことができません。

英語による授業を導入するというのは大変興味深いのですが、学部生向けの場合はかなり難しいものがあると思います。ただ、専門知識や技術英語に対する理解が進んだ大学院生に対してであれば、可能性がありそうに思います。

ところで、工学部には、英語を苦手とする学生が多いのですが、彼らに英語の必要性を説いて、勉強するように仕向けるのは、かなり難しいものがあります。年数をかけて嫌いになっているので、そこからの方向転換にはかなりの労力が必要です。指導を放棄するわけではありませんが、学生本人が何かのきっかけで、英語の必要性に気づく以外に効果的な方法はないような気すらします。きっかけというのは、大学ですと、例えば、留学生とのコミュニケーション、国際交流行事への参加、国際会議での発表などがそれに当たると思います。実際、国際会議での発表を経験すると、否が応でも自分の英語力の未熟さに気がつくと思いますので、自ら進んで英語を勉強するようになります。このように、大学では、授業だけでなく、きっかけ作りの場を提供することも大切なのではないかとと思います。

今後も、工学部の英語教育に対するアドバイスがあればいただきたいので、よろしくお

願います。

(阿賀黎明高等学校 水戸直和先生)

大学の先生にお訊きしたいのですが、先ほど高校の現場に望む声というのは十分に把握しました。そこで、もしあれば、現在の高校の英語教育の強み、生徒の強みがあれば教えていただきたいです。

(平野講師)

今の学生を見ていて感心するのは、ネイティブを前にしても決して物怖じしないということです。本日の講師の中では私が一番若いんじゃないかと思いますが、80年代前半に自分が通った高校ではネイティブに触れる機会は皆無でした。中学もそうです。大学は公立だったんですが、英会話の授業が1種類あったけれど必修ではなかったので、あえてそうしようと思わなければ、ネイティブの先生に接する機会はありませんでした。

ところが今の学生は、先ほどの永村先生のご報告にありましたように、最近ALTが減らされているという問題があるとはいえ、それでもネイティブの先生方に接する機会というのは、我々の学生時代に比べると多いわけです。私の周りの英米文化履修コースの学生を見ても、ネイティブの先生が担当している授業に出ても物怖じしないし、授業以外の時間も自ら進んで研究室を訪ねて質問したりとかしている。そこは非常に強みだと思うし、私なんかはうらやましいな、と思うことがよくあります。

(司会)

それでは、もう20分も時間を超過していますので、以上で「高大接続のための英語教育シンポジウム」を終了させていただきます。本日は学内だけでなく学外からも多数の先生方にご参加いただきまして、大変ありがとうございました。

# 当日配付資料



資料 1

「高大接続のための英語教育シンポジウム」  
(2007,2,20, 新潟大学総合教育研究棟D棟 1階大会議室)

**発表テーマ： 現在の高等学校の英語カリキュラムについて**

新潟県立巻高等学校 永村 邦栄

1.1 普通科の英語単位数サンプル

巻	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
英語 I	4				
OC I	2				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				2	

A1校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				2	(2)

A2校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				2 + (2)	(2)

A3校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				2 + (3)	

B1校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				(2)	(2)

B2校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択				(2) + (2)	(2)

B3校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	2	2
選択		(2)	(2)	(2) (3) (4)	(2) (3) (4)

C校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		4	4		
英語 R				4	4
英語 W		2	2	3	3
選択				(2) + (2)	

D校	1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系
OC I	2				
英語 I	4				
英語 II		5	5	2	
英語 R				5	5
英語 W		2	2	2	2
選択					(2)

## 1.2 考察

- 
-

資料 2

2. 各年次の使用教材

1年次	英語 I	OC I	文法	週末課題	語彙	リスニング	その他
春休み							ベネッセ高校英語入門
2月	UNICORN ENGLISH COURSE I (文英堂)	BIRDLAND (文英堂)	Forest Intensive English Grammar27(桐原書店) ORBIT BASIC DRILLS (山口書店) 総合英語 Forest 参考書 (桐原書店)	語彙ノート提出 <2年9月まで> 文法プリント問題提出<適宜>	語彙ノート (英語 I II・定期考査・長期休業課題帳・模試の未知語練習ノート)	OC I Team -Teaching	英語の新研究(新学社)  ベネッセオーダー問題集(夏休み)(冬休み)
	UNICORN ENGLISH COURSE II (文英堂)			基礎からの英語構文90 (第一学習社) <2年1月まで>			
2年次	英語 II	英語W	文法	週末課題	語彙	リスニング	その他
4月				基礎からの英語構文90	語彙ノート	Hyper Listeninng Plus Elementary (桐原書店)	長文が好きになるきっかけの本(啓隆社) 希望者購入約200人
5月		Forest Extensive English Grammar Training Book (桐原書店)					
10月		Forest 参考書読書開始					
12月	UNICORN ENGLISH READING (文英堂)				音読英単語1 (Z会) (小テスト)		ベネッセオーダー問題集(春休み)(夏休み)
1月				英語頻出総合問題集 ポイントアップ プレ標準編 (啓隆社) <3年7月まで>	音読英単語2 (Z会) (小テスト) <3年7月まで>		
2月		Vivid Writing (第一学習社) <3年9月まで> Next Stage (桐原書店) (週1回小テスト) <3年9月まで>					
3年次	英語 R	英語W	文系選択英語	補習	語彙	リスニング	その他
5月		Vivid Writing Next Stage	長文と文・作・語法の18章 (山口書店)	長文と文・作・語法の18章 (山口書店) <u>理系のみ</u>	音読英単語2	Listeninng Essentials 2.5 (啓隆社)	
夏休み	センター試験 TACTICS (桐原書店)		長文と文・作・語法の18章 (山口書店)		アプリフト英語リスニング(Z会)		
9月			長文と文・作・語法の20章 (山口書店)	国公立大学入試 長文過去問 <u>文理共</u>			
10月	MAKE YOUR ASCENT TO BETTER ENGLISH READING (数研出版)	英語頻出総合問題集ポイントアップ 発展編 (啓隆社)					
12月	進研センター試験直前演習 (ベネッセ) Genius Listening (大修館)						
1月	MAKE PROGRESS IN ENGLISH READING(数研出版) 伝わる英語表現法 (岩波書店) プロセス英作文(桐原書店)						

3. 各年次の目標

★ 1年次の学習到達目標

- ①予習、復習、宿題をやり学習習慣を身につけさせる。
- ②辞書を引く習慣を身につけさせる。
- ③品詞・SVOCを意識しながら一文一文きちんと意味がとれるようになる。
- ④発音記号を見て、新出単語の発音ができるようになる。
- ⑤テープと同時に音読できるくらいまで訓練する。
- ⑥文法は、オービットのレベルの基本事項をきちんと学習させる。2年次で深めたり、再整理していく。
- ⑦夏休み～11月進研模試まで学力を維持する。

1年次定期考査の留意事項

英 I

- 語彙ノートは週末課題や定期考査後に提出。
- 試験範囲に L1 から試験範囲直前までの欄外の新出単語・熟語を20点分継続的に含める。

OC I

- 試験範囲に第1章から試験範囲直前までの Exercise を20点分継続的に含める。
- リスニング問題は、1, 2学期は定期考査の 2割、3学期は 1割

★ 2年次の学習到達目標

- ①文法参考書を読破する。
- ② Training Book をやり文法の力をしっかり付ける。(1月終わりまで)
- ③構文90を身につける。
- ④フレーズリーディングができるようになる。(12月終わりまで)
- ⑤教科書穴埋め本文を埋めながらすらすら音読できるようになる。(12月終わりまで)
- ⑥英語 I、II、Forest、構文90に出てきた単語熟語を覚える。(11月終わりまで)  
音読英単語1, 2にスムーズに移行できるように。
- ⑦教材 Hyper Listening を自学自習することによりリスニング力を維持する。

2年次定期考査の留意事項

英 II

- 語彙ノートは週末課題や定期考査後に提出。
- 試験範囲に1年 Unicorn L1 から試験範囲直前までの欄外の新出単語・熟語を20点分継続的に含める。

英 W

- FOREST ○試験範囲に第1章から試験範囲直前までの Exercise を20点分継続的に含める。
- リスニング ○英 W の定期考査に 1割 教材は Hyper Listening 自学自習

★ 3年次の学習到達目標

- ①2年次の基礎力を伸ばす。
- ②「訳さないと読んだ気がしない」からの脱却。和訳は難解な部分に限定する。
- ③できるだけ速く内容把握させる。
- ④進度を速め、「きつさ」を体験させる。(部活引退者の出始める6月から)
- ⑤部活引退者に学習ペースをつかませる。
- ⑥センターレベルの語彙・文法・語法を認識させる。(夏休み終わりまで)
- ⑦基礎力確認(夏休み課題考査)
- ⑧長文問題に慣れさせ、読むスピードも上げさせる。(夏休み補習から)
- ⑨理系の基礎力を落とさせない。(補習)
- ⑩ハイレベル者の実力を伸ばす。(9月補習から)
- ⑪より高いレベルの長文・語彙・文法・語法の実力を養成する。(10月から)
- ⑫センター試験問題に慣れさせる。(12月1月)
- ⑬各自の英語力に合った表現で英語を書けるようにさせる。

3年次定期考査の留意事項

英 W

- リスニング ○英 W の定期考査に 2割 教材は Hyper Listening + Listening Essentials 2.5 自学自習

## 平成 17 年度以降の新潟大学における英語教育 (恩田公夫)

平成 19 年 2 月 20 日 「高大接続のための英語教育シンポジウム」

### (1) はじめに

- a) H16 年独立法人化 → H17 年英語カリキュラム改革
- b) 「全学英語」と「学部英語」
- c) 両者を組み合わせてどのような英語教育を行うかは各学部の責任

### (2) 共通英語 (日本人教員担当)

- a) 週 1 回授業・1 単位・入試成績等による習熟度別クラス編成・40 名
- b) 科目のねらい: 高校までの知識を再構成し、大学生にふさわしい読解力を習得
- c) リーディング (60 分) + リスニング (30 分)
- d) 統一副教材
- e) TOEIC : 470 点以上 → 基礎英語の単位を認定 → 2 学期から発展英語  
470 点未満 → 2 学期は基礎英語を履修
- f) TOEIC 導入の意義: 学生の学習意欲を引き出す

### (3) 基礎英語 (日本人教員担当)

- a) 週 1 回授業・1 単位・TOEIC スコアによる習熟度別クラス編成・40 名
- b) リーディング + リスニング

### (4) 発展英語 (主に外国人教員担当)

- a) 週 1 回・2 単位・20 名
- b) 英会話中心
- c) 選択でさらに 2 コマまで受講可

### (5) 応用英語 (外国人教員担当)

- a) 週 1 回・2 単位・15 名
- b) 英会話中心
- c) 発展英語の単位を取得済み + TOEIC730 点以上の学生を対象
- d) 履修コマ数 (単位数) に制限なし

### (6) さいごに

- a) 専門教育との接続重視 → 共通英語、基礎英語 (読解力養成中心)  
実践重視 → 発展英語、応用英語 (実践的なコミュニケーション能力養成中心)
- b) 高校の英語教育との接続: センター試験でのリスニング導入
- c) 英語教育改革へのさらなる努力

共通・基礎・発展・応用英語 履修パターン例

[1年生・第1学期]

共通英語（1単位科目）履修

(学期末)

全学実施 TOEIC 受験

470点未満

470点以上

基礎英語 認定（1単位）

[1年生・第2学期]

基礎英語（1単位科目）履修

730点未満

発展英語（2単位科目）  
履修可

730点以上

発展英語 認定（2単位）

[2年生・第1学期]

発展英語（2単位科目）履修可

[2年生・第2学期以降]

発展英語（2単位科目）および 応用英語（2単位科目）  
履修可

発展英語（2単位科目）  
および  
応用英語（2単位科目）  
履修可

発展英語（2単位科目）  
および  
応用英語（2単位科目）  
履修可

## 英語アンケート

今年度から新たに導入された英語カリキュラムについて、あなたの意見・感想を聞かせてください。今後の授業改善やカリキュラム改革の参考にします。(このアンケートは第1学期に共通英語を受講した1年生だけを対象にしています。2年生以上の人や、1年生でも何らかの事情で共通英語を受講しなかった人は回答しないでください)

\*記入上の注意：HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルを使用してください。

(0) あなたの学部(医学部、歯学部は学科も)を下表を参照してマークしてください。(氏名、学籍番号、科目名、実施年月日は記入する必要がありません)

「学籍番号マーク欄」に左詰(上2桁)でマークしてください					
人文学部	00	理学部	44	歯学部口腔生命福祉学科	67
教育人間科学部	11	医学部医学科	55	工学部	77
法学部	22	医学部保健学科	56	農学部	88
経済学部	33	歯学部歯学科	66		

(1) 7月に実施されたTOEICの結果はどうか。

<1. 受験しなかった、2. 350点未満、3. 350点~415点、4. 420点~465点、5. 470点以上>

(2) 共通英語が習熟度別クラス編成になっていて、受講しやすかった。(医学部保健学科の共通英語は、習熟度別クラス編成になっていません。そこで、この質問を次のように読みかえて回答してください。「共通英語を習熟度別クラス編成にした方がよいと思う。」)

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(3) 共通英語がTOEIC対策(リスニング)と読解力養成の2本立てになっているのはよかった。

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(4) 共通英語のTOEIC対策(リスニング)の時間はもっと増やした方がよいと思う。

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(5) TOEICを受験してよかったと思う。(受験した人だけ回答してください)

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(6) TOEICをもう一度受験してみたい。(受験した人だけ回答してください)

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(7) 「統一英語副教材」(以下「副教材」)は共通英語の授業で活用されていた。

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

(8) 「副教材」のレベルは適切でしたか。

<1. 難しすぎた、2. やや難しすぎた、3. ちょうどよかった、4. やや易しすぎた、5. 易しすぎた>

(9) 「副教材」は英語学習やTOEIC受験の役にたった。

<1. 非常にあてはまる、2. ややあてはまる、3. どちらともいえない、4. あまりあてはまらない、5. まったくあてはまらない>

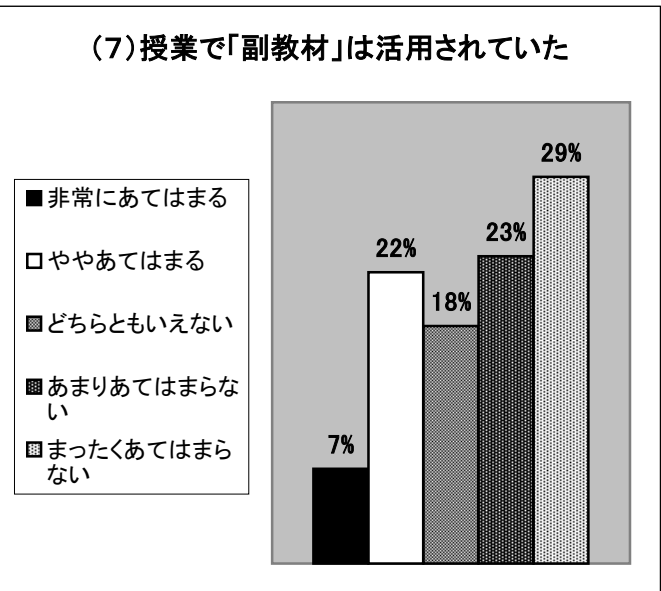
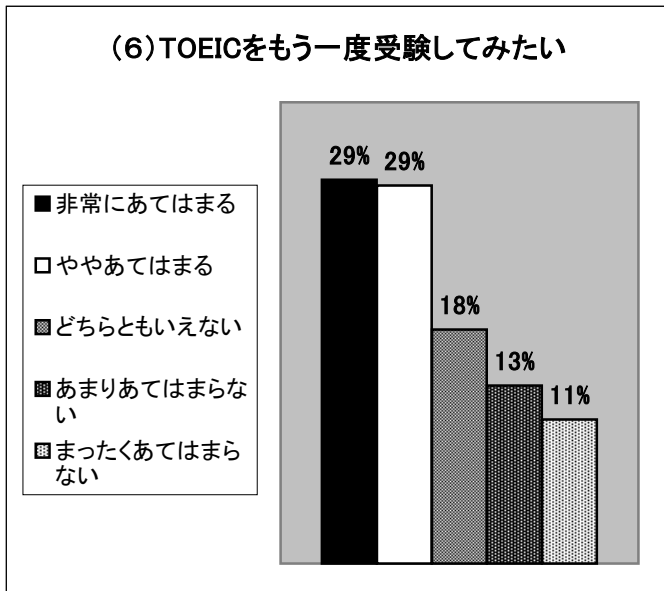
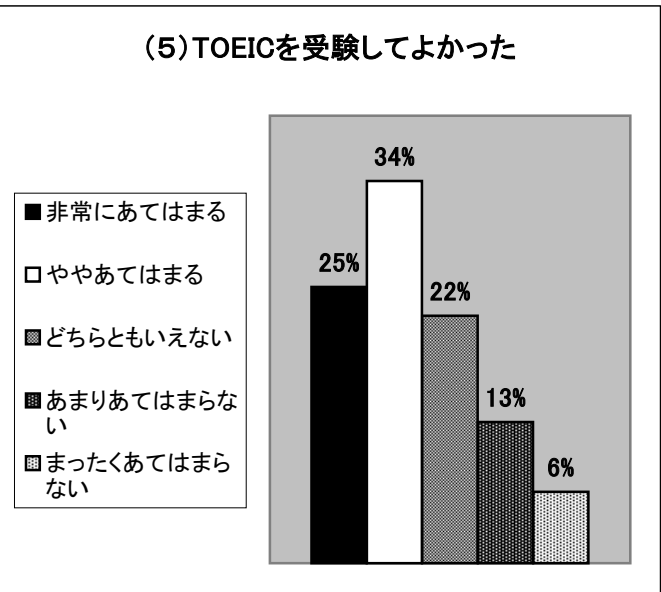
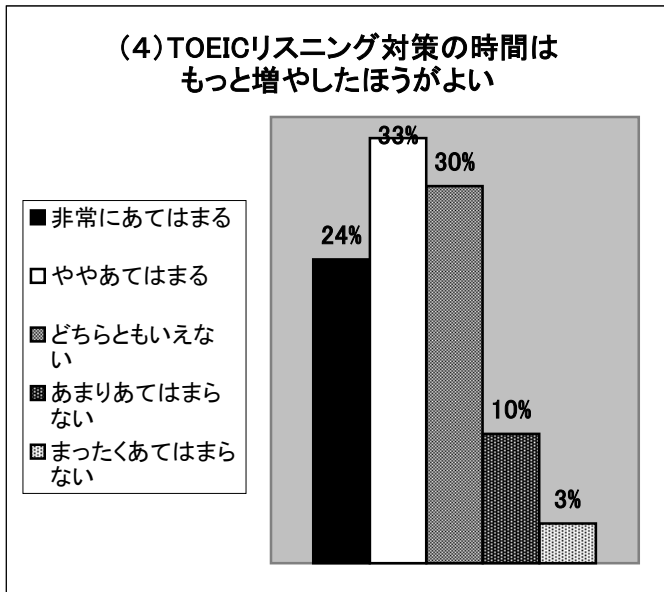
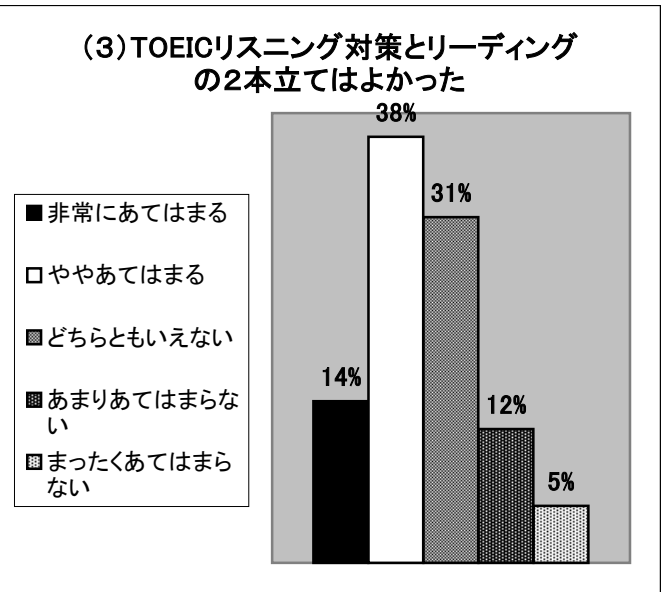
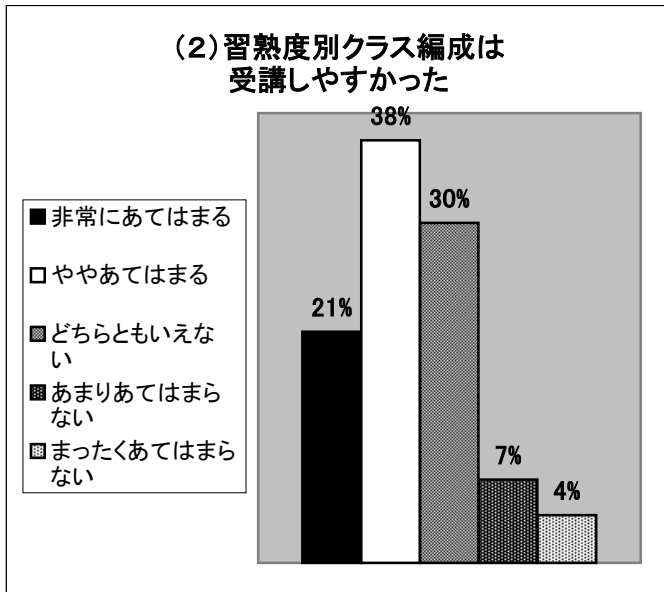
(10) 現在、新潟大学ではコンピュータを利用した新たな外国語学習法(CALL)の導入が検討されています。あなたは興味がありますか?

<1. 大いにある、2. ややある、3. どちらともいえない、4. あまりない、5. まったくない>

(11) 英語の必修単位数は、どうすべきだと思いますか。(法学部の学生は「英語6単位必修」と考えて回答してください)

<1. 大幅に増やす、2. 少し増やす、3. 今のままでよい、4. 少し減らす、5. 必修ではなく選択にする>

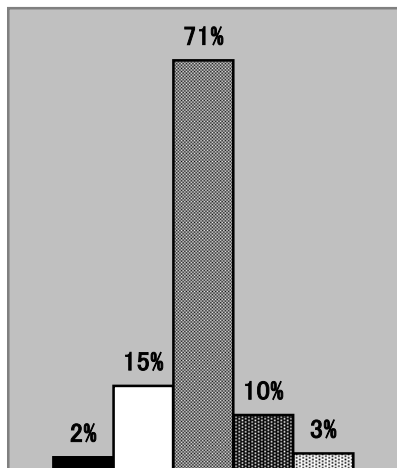
**全学部 全体 1893名**





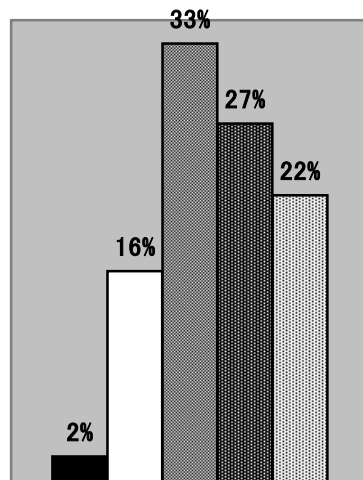
(8)「副教材」のレベルは？

- 難しすぎた
- やや難しすぎた
- ちょうどよかった
- やや易しすぎた
- 易しすぎた



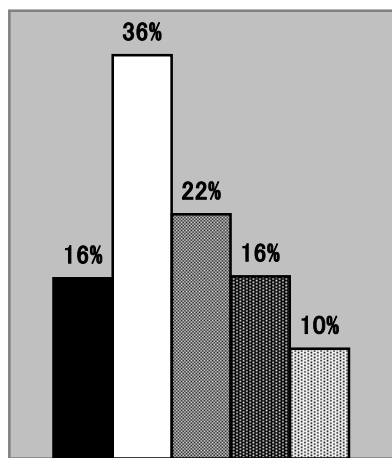
(9)「副教材」は役に立った

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



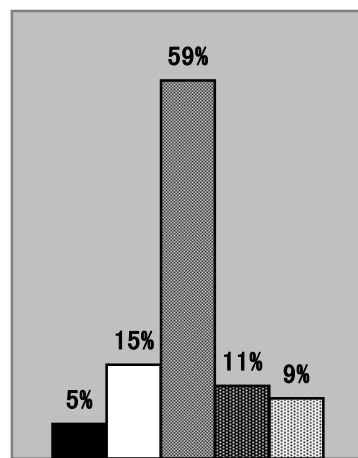
(10)CALLに興味はあるか？

- 大いにある
- ややある
- どちらともいえない
- あまりない
- まったくない



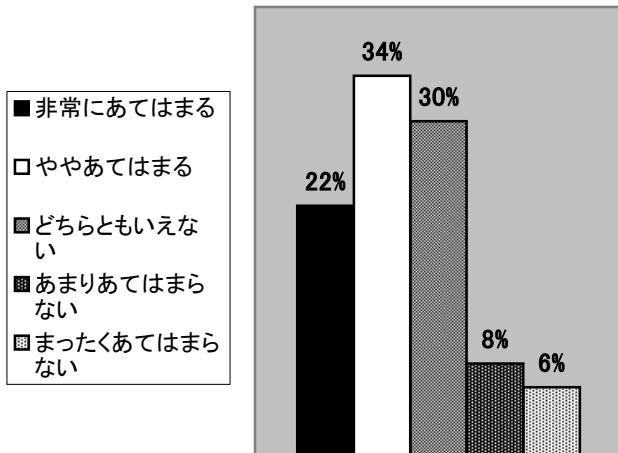
(11)英語の必修単位数は  
どうすべきか？

- 大幅に増やす
- 少し増やす
- 今のままでよい
- 少し減らす
- 必修ではなく選択にする

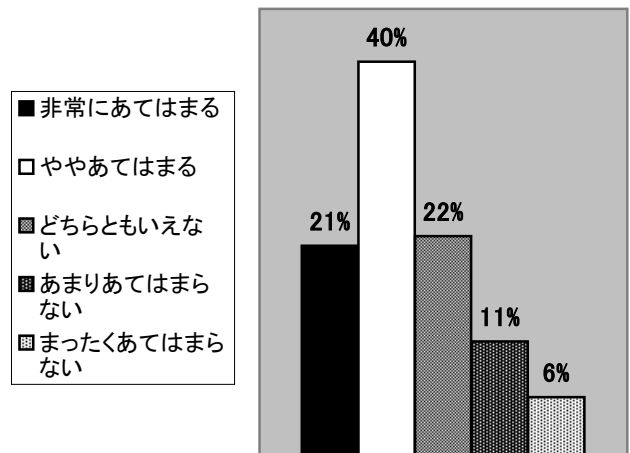


全学部 TOEIC470以上 518名

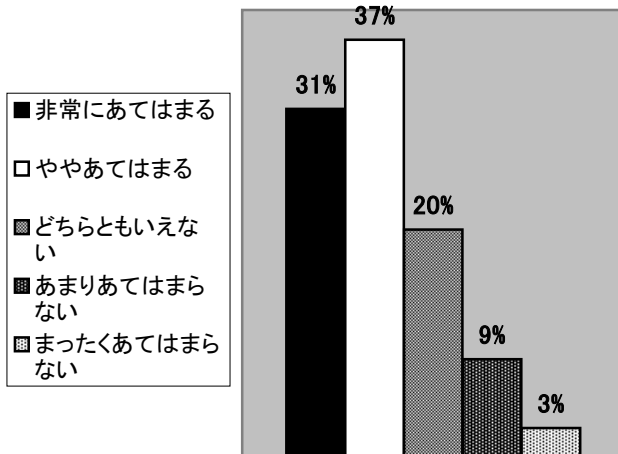
(2) 習熟度別クラス編成は受講しやすかった



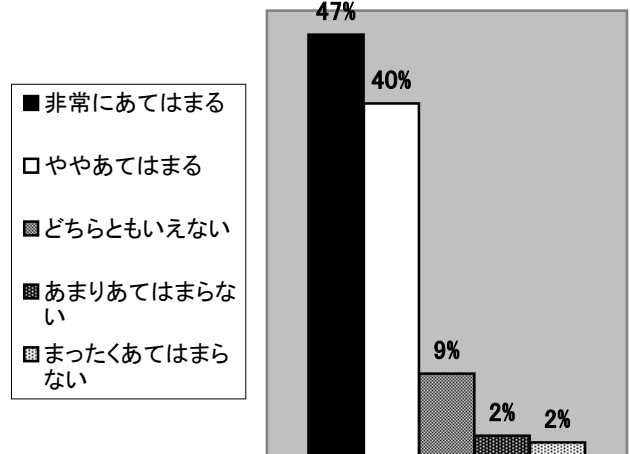
(3) TOEICリスニング対策とリーディングの2本立てはよかった



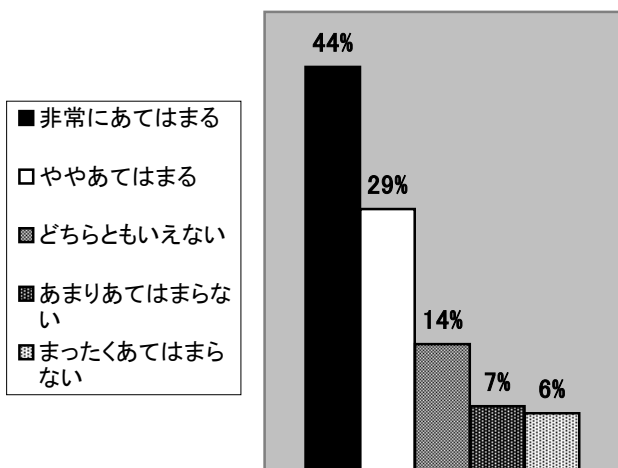
(4) TOEICリスニング対策の時間はもっと増やしたほうがよい



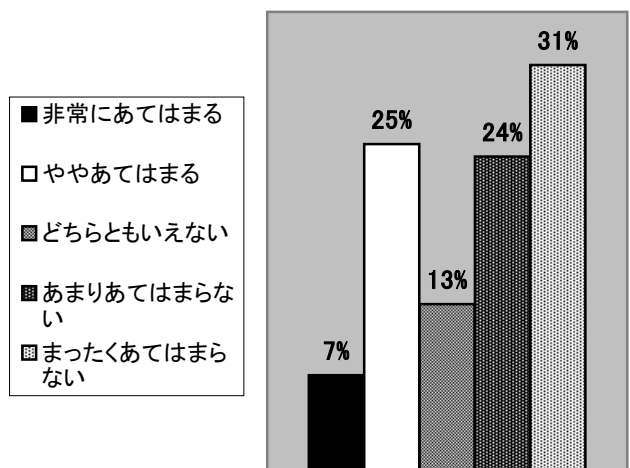
(5) TOEICを受験してよかった



(6) TOEICをもう一度受験してみたい

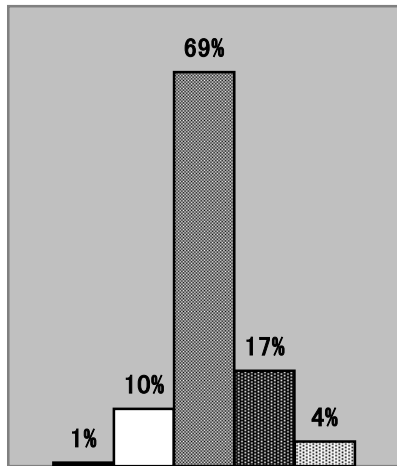


(7) 授業で「副教材」は活用されていた



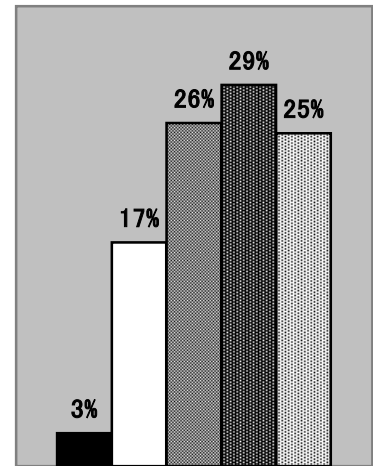
(8)「副教材」のレベルは？

- 難しすぎた
- やや難しすぎた
- ちょうどよかった
- やや易しすぎた
- 易しすぎた



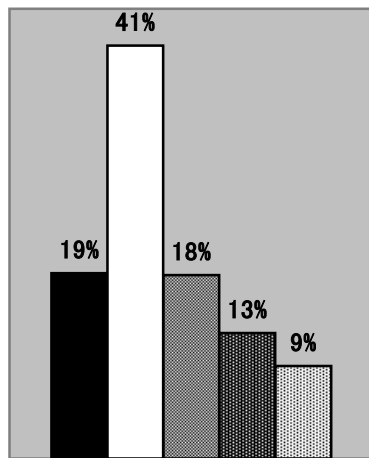
(9)「副教材」は役に立った

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



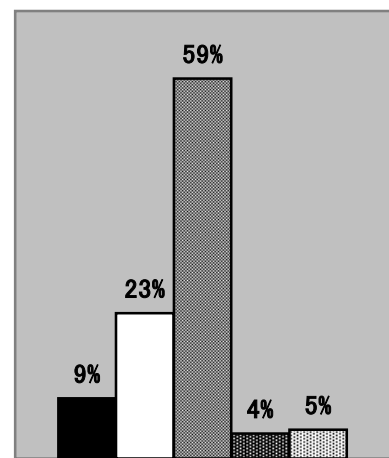
(10)CALLに興味はあるか？

- 大いにある
- ややある
- どちらともいえない
- あまりない
- まったくない



(11)英語の必修単位数は  
どうすべきか？

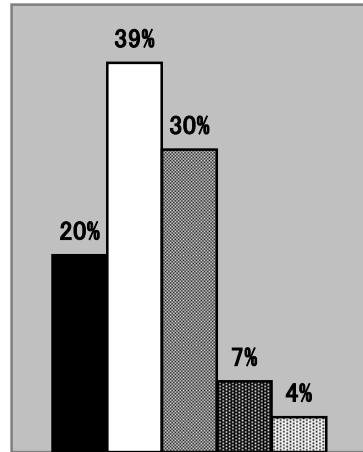
- 大幅に増やす
- 少し増やす
- 今のままでよい
- 少し減らす
- 必修ではなく選択にする



全学部 TOEIC470未満 1309名

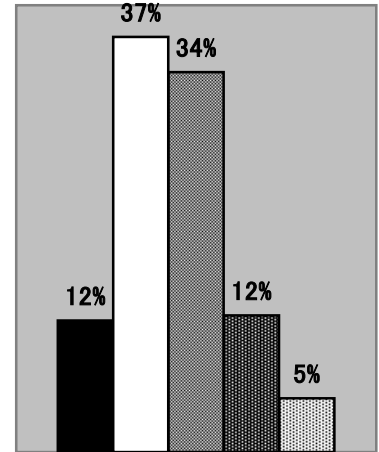
(2) 習熟度別クラス編成は受講しやすかった

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



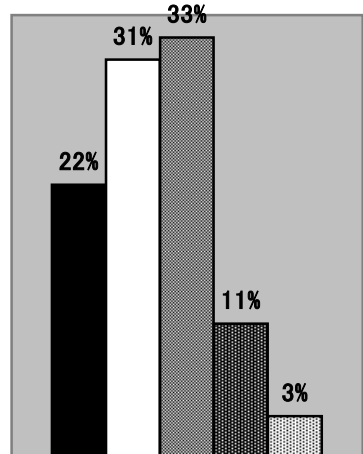
(3) TOEICリスニング対策とリーディングの2本立てはよかった

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



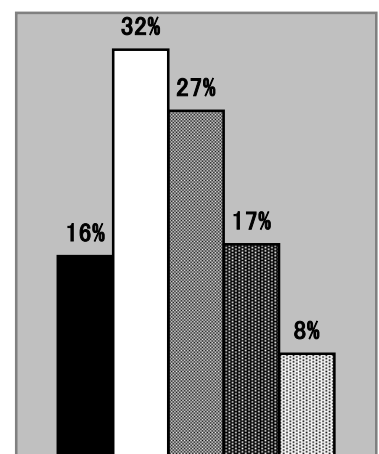
(4) TOEICリスニング対策の時間はもっと増やしたほうがよい

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



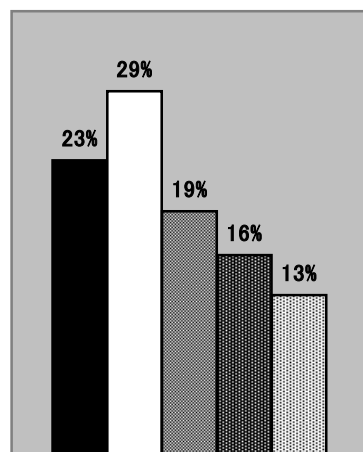
(5) TOEICを受験してよかった

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



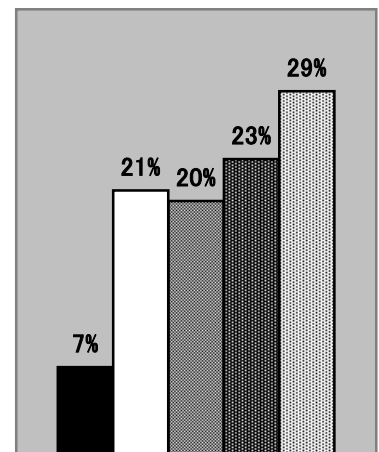
(6) TOEICをもう一度受験してみたい

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



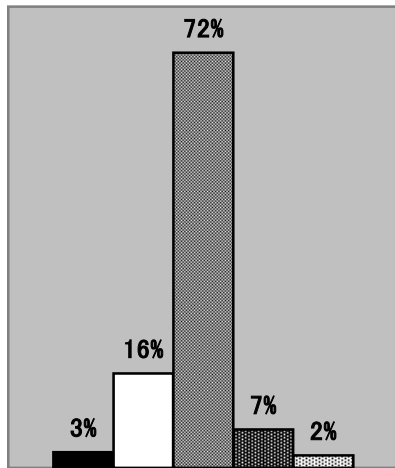
(7) 授業で「副教材」は活用されていた

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



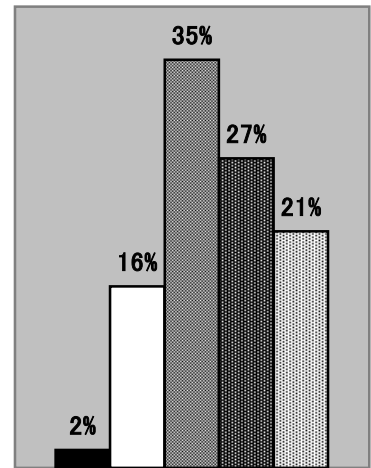
(8)「副教材」のレベルは？

- 難しすぎた
- やや難しすぎた
- ちょうどよかった
- やや易しすぎた
- 易しすぎた



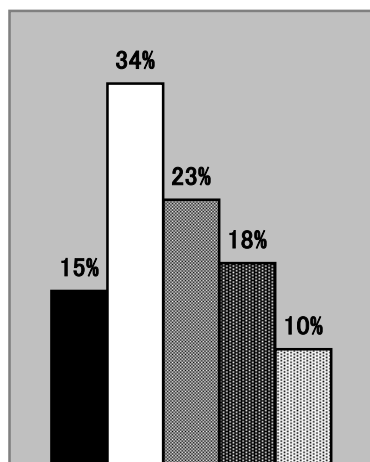
(9)「副教材」は役に立った

- 非常にあてはまる
- ややあてはまる
- どちらともいえない
- あまりあてはまらない
- まったくあてはまらない



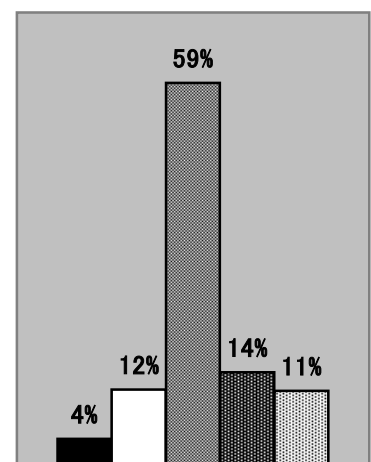
(10)CALLに興味はあるか？

- 大いにある
- ややある
- どちらともいえない
- あまりない
- まったくない



(11)英語の必修単位数はどうすべきか？

- 大幅に増やす
- 少し増やす
- 今のままでよい
- 少し減らす
- 必修ではなく選択にする



## 発表テーマ：新潟大学の入学試験と高等学校の英語教育

県立新潟南高等学校 教諭 萩野俊哉

### I. 全体的なこと

#### 1. 新大の英語入試問題

Ⅰ 長文読解問題：部分和訳，内容説明

Ⅱ 長文読解問題：部分和訳，内容説明

Ⅲ 英作文問題：部分英訳

Ⅳ リスニング問題（2006年度は教育人間科学学校教育教科教育英語のみ）：英問英答，英問和答

2. 全体を通して，普段の高校の授業にまじめに取り組み，コツコツと学習を積み重ねる生徒にとってはそれほど難しいと感じる問題ではないだろう。分量も適切である。まじめな生徒が報われる「良問」と言える。

#### 3. 長文問題について

(1) 語彙面，文法・構文面ともに標準的難易度である。主に3年次で履修する「リーディング」の科目で用いる教科書の，難しい部類の教科書本文と同程度かやや上くらいのレベルである。

(2) 内容の抽象度は高くない。読みやすい。

(3) 下線部和訳は，語彙面や文法・構文面での理解ができれば前後関係の理解は不要であり，下線部の英文単独の理解のみで正解が得られる。

(4) 「〇〇字以内で具体的に述べなさい」という問題も，比較的平易であり，下線が引かれている該当箇所の近辺を読み取れば答えられるものである。ただし，理解したことを簡潔にまとめる表現力が必要であり，今の高校生はこの点が弱い。高校の指導でも，やや手薄となっている感がある。

(例)「読み取った内容を自分のことばでまとめてごらん。」

「この文章で作者は結局何が言いたいのかまとめてみなさい。」

「本文を要約しなさい。」

#### 4. 英作文問題について

(1) 日常的な内容の英作文が出題される。高校現場でも，まずは身近なところから，ということで英作文指導をする場合が多いので，そのような高校の指導の実際と合致する。

(2) 求められる英文構造もそれほど複雑なものではなく，素直な英文を書くことで十分に対応できる。高校の指導においても，教科書等の基本例文をしっかりと身につけさせることを基本として対応できそうである。

(3) 語彙面でも，基本的には高2レベル程度をしっかりとマスターしておけば対応できそうである。

#### 5. リスニング問題について

(1) 聴き取る英文自体は平易な内容で，レベルとしてもそれほど高くない。(特に「問題A」は。) センター試験レベルと同等か，やや上といったところか。

(2) ただし，設問に適切に答えて表現するという点になると，生徒にはやや難と感じられるだろう。上記3.(4)でも指摘したが，理解した内容を素早く適切にまとめて表現する能力の養成が課題である。

## II. 個々の具体的なこと

### 2006 年度入試問題より

#### 1. 大問Ⅰ 長文読解問題：部分和訳，内容説明

(1) 「1.(a)を和訳しなさい。」

“We have been pushed to consider it, not because of concerns about whether it is psychologically healthy for children to study here, but because of child protection laws which have come into play this year for the first time.”

「赤本」の解答：「私たちがそのことを検討せざるをえなくなったのは、子供が大学で学ぶことは、その子の心理的な健康にとってよいことであろうか、という懸念からではなく、今年新たに児童保護法が施行されたことによる」

→We have been pushed to consider it, の it は具体的に何を指しているのかを明示して和訳しなくてよいのか。

①高校の現場の指導，そして評価（定期考査等）においても，it の指す内容を明示させて和訳させるのが一般的であり，望ましいと考えられる。

②ただし，設問の指示に「it の指す内容を明示して」という文言がなければ，明示する必要はないと生徒に教える。それでよいのか。

(2) 「(d)の Ruth Lawrence と Yinan Wang の相違を句読点を含め，80字以内で具体的に述べなさい。」

→人名はどのように答案用紙に書けばよいのか。そのまま(Ruth) Lawrence, (Yinan) Wang と綴って記入するのか（その際の字数のカウントはどうなるか），それともローレンス，ワンとカタカナで記入すべきなのか。もし，後者としたら高校生にはやや「厳しい」のではないか。人名の読みは難しい。脚注を施すなど，何らかの工夫が必要ではないか。

#### 2. 大問Ⅱ 長文読解問題：部分和訳，内容説明

「4. (d)を和訳しなさい」

it may be argued that many ads are skillful, clever and amusing, and that it is unjust to make them a scapegoat for all the sorrows of the modern world.

→後半の that 以下の解釈でつまづいた生徒が多かったと思われる。

理由①：たとえば，scapegoat はかつては高校生ならそれほど英語が得意でなくても，ある意味常識として知っていたものであるが，今の高校生にはそれは期待できない。また，普段の英語学習の中でも，教科書を含めてあまり登場しない単語である。

理由②：all the sorrows of the modern world の意味が生徒には具体的に想起しづらいだろう。ましてや，a scapegoat for all the sorrows of the modern world の意味するところが何であるかは理解困難であると思われる。

#### 3. 大問Ⅲ 英作文問題：部分英訳

日頃，高校生を指導している身としては，おそらく次の点で生徒はつまづくと思う。

(1) 「フォークやスプーンやほかのものを床に落とす」→fall を使ってしまうのでは？

(2) 「代わりのおねがいする」→「代わりのも」＝「新しいもの」と解釈できず，substitute や substitution などの単語を使ってしまうのでは？

(3) 『なんとなく』大学に入学した日本人学生 → 「なんとなく」をどう訳すか，がポイント。

(4) 「なぜなら，他人に伝達したい何かがあるのだからだろうか，という疑いが生じてくるからだ。」→構文の処理が難しい。単に Because で書き始めた高校生が多かったのではないか。a doubt (as to) whether ... や a question (of) whether ... の形も知っているようで知らない生徒が多い。

#### 4. 大問Ⅳ リスニング問題：英問英答，英問和答

内容，レベルともに適切。問題Aには英語で，問題Bには日本語で答えさせるという意図もよくわかる。もう少し全体の量を多くして，試験時間もたっぷりとして実施してもよいと思う。

### Ⅲ. 最後に

新大の英語入試問題＝「オーソドックス」

良く言えば，「安定感がある」，「標準的である」

悪く言えば，要するに「おもしろくない」

確かに，英文和訳や和文英訳を通して，いろんな意味で受験生の「基礎力」を測ろうとする意図はよくわかる。しかし，それにしてもその傾向が強すぎる。（「徹底している」という「良い言い方」もありますが...）

そして，大学入試問題の高校現場に与える影響は大きい。

（1）新大の入試問題のレベルが上がったら...

→今よりもっとガリガリに生徒を追い込んで，勉強させて...（?）

逆に，下がったら...

→ゆとりをもって指導ができる...（?）

（2）問題形式が変わったら...

→早速その分析と対応策を練るだろう。校内で，全県規模で！

いずれにせよ，「大変な」ことになる。

それを承知で提言を2つ。

1. communicative な問題も加えたらどうか。

（例）

- ・文章（日本文でもよい）を読ませて，それを英文で要約させ，さらに，内容に関する自分の意見を英文で書かせる。
- ・長文を読ませ，読み取った内容を図表やグラフ等にまとめさせる。（information transfer という手法。）

2. リスニングテストをより充実した形で実施してもらいたい。

（新大はなぜリスニングテストを全学規模で実施しないのか。また，年度によって実施する学部学科が変わるのはなぜか。）

→よく練られた問題で，そして，十分に時間をかけてリスニングテストを実施する大学はすばらしい。

なぜこのような提言をするか。

→それによって英語教育の現場がより活性化するであろう，との期待からである。

入試は現場を変える。そして，現場も入試を変える，と言いたい。しかし，実際はどうか...

今後の「高大接続」への取り組みが鍵となる。さらに建設的に発展しますように... ！



## 大学生に望む英語力——文系教員の立場から

高橋 正平

### ●英米文化履修コースでは何を学ぶのか

- ・英米文化演習   ・英米文化基礎演習   ・英米文化入門   ・英米文化研究法
- ・英米文化概論
- ・英米言語概論   ・英米言語論
- ・実践英語セミナー   ・英語アクティヴ   ・英語表現法

- ・英米文化では、「英米の文学・文化」「英語学」「実践英語」を学ぶ。
- ・原書・文献（英文）を読む。
- ・最終的には4年次に卒業論文がある。
- ・原書を読み、批判的な力、及び自分の考えを自分の言葉で表現することが要求される。

スタッフ：専任6名（英米文学・文化4名   英語学2名）学内非常勤1名   学外  
非常勤3名＋1名（集中講義）   助手1名

- ・2005年度の卒業論文タイトル（抜粋）

〈英語学〉

- ・ On Middle Constructions in English
- ・ Notes on Multiple Wh-questions in English

〈イギリス文学〉

- ・ Jane Austen 研究－ Anne に見る新たな理想的女性像－
- ・ A Study of *Oliver Twist*－主人公としてのオリヴァーの意味－
- ・ 『チェンチ家』研究－ベアトリーチェの「親殺し」－

- ・ D.H.ロレンス研究－"the conflict of love and hate"から"blessedness"へ－

〈アメリカ文化〉

- ・ F・スコット・フィッツジェラルド研究  
－"Winter Dreams"と *The Great Gatsby* の比較－
- ・ A Study of Edna St. Vincent Millay－詩を生む原動力－「美」への追求心－
- ・ 正義の国アメリカとキリスト教国アメリカー同時多発テロ後のアメリカを  
みる－
- ・ ギャングから平和活動家へ－ CARL UPCHURCH の内面的変化－

### ●英米文化で学ぼうとする学生に望む英語力

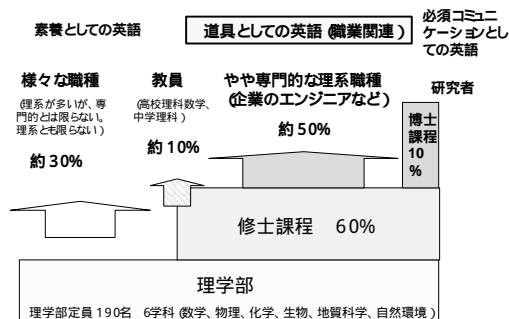
- ・ 原書を読むための英語力

# 大学生に望む英語力 —理系教員の立場から—

理学部を例にして

松尾正之 (理学部)

## 理学部学生の進路と英語の必要性



## 理学部学生になぜ英語が必要か

念頭におく学生像

大学院修士課程卒 やや専門的な理系職種での企業就職

なぜ必要性か

職場では英語が必要となる可能性が高い。英語が使えたと仕事に有利

最近の技術系企業は、外国との取引多い。技術者でも技術仕様のやり取りなどに関与。外国工場への滞在など。

英語で書かれた技術資料などを調べる

技術者向け社内英語教育を行う会社も多い (TOEIC利用も)

学部 修士課程在学中に、「専門分野」に関する 実践的な英語経験 を積んでおくことが不可欠。

「実体験」のなかで 使うことが重要。 実体験 = 学部大学院での専門

文法知識などの求める水準は、高校 全校共通英語と差はない。

## 理学部学生に望む英語力 (1)

理学部では：

4年次：卒業研究 課題研究のゼミ論議：～3時間/週、通年

1. 2冊の英語で書かれた大学生向け専門教科書、若干の英文論文や英文科学雑誌記事を、教師の指導の下で読む。 専門研究 実験などと平行して行う

3年次または2年次：専門英語またはゼミ論議：～1.5時間/週、半年、2単位

英文大学教科書の一部を論議、など。 大学共通教育と卒業研究の橋渡し

その他：

研究室を訪問して外国人研究者や留学生におひげかない。英語で書かれたホームページを多少は読める。

修士課程では：

専門研究を教師の指導のもとで行う。修士論文を書く

研究資料や必須参考文献のほとんどは英語で書かれている。(日本語資料が多い分野もあるが。)

若干の英文専門書、10数編の英文論文を指導あり指導なし両方で読み進める。

外国人研究者と話をする機会がある。英語による一般向け講演を聴いて概略をつかむ。国内開催の国際研究会で、ポスター発表をする。英語でポスターを作る。 英単語でGoogleできる。

## 大学院入試英語問題

ノーベル物理学賞受賞講演から

[ 1 ]

以下の文は、2001年にノーベル物理学賞を受賞した W. Ketterle が授賞式で行った講演の収録の一部である (Nobel lecture: When atoms behave as waves: Bose-Einstein condensation and the atom laser, Rev. Mod. Phys. 74, 1131 (2002) より)。この文を読んで問いに答えよ。

The lure of lower temperatures has attracted physicists for the past century, and with each advance towards absolute zero, new and rich physics has emerged. Laypeople may wonder why "freezing cold" is not cold enough. But imagine how many aspects of nature we would miss if we lived on the surface of the sun. Without inventing refrigerators, we would only know gaseous matter and never observe liquids or solids, and miss the beauty of snowflakes. Cooling to normal earthly temperatures reveals these dramatically different states of matter, but this is only the beginning: many more states appear with further cooling. The approach into the kelvin range was rewarded with the discovery of superconductivity in 1911 and of superfluidity in helium-4 in 1938. Cooling into the millikelvin regime revealed the superfluidity of helium-3 in 1972. The advent of laser cooling in the 1980s opened up a new approach to ultralow-temperature physics. Microkelvin samples of dilute atom clouds were generated and used for precision measurements and studies of ultracold collisions. Nanokelvin temperatures were necessary to explore quantum-degenerate gases, such as Bose-Einstein condensates first realized in 1995. Each of these achievements in cooling has been a major advance, and recognized with a Nobel prize.

This paper describes the discovery and study of Bose-Einstein condensates (BEC's) in atomic

## 学部での英語教育の教材

大学教養レベルの米国生物学科教科書を2次前後に輪講で読む



discover a cure for cancer. Or perhaps you will choose to enter an applied field of biology such as dentistry, medicine, or veterinary medicine. Even if you are not planning a career in one of the biological sciences, learning about this exciting science will enable you to better understand yourself, your environment, and the organisms with which you share your planet. As you become biologically literate you will increase your understanding of the impact biology continues to have on life and society.

In this last chapter we examine some of our everyday assumptions about living things, and start to formulate a structure for organizing our knowledge. First, as we begin our study of living things, we need to develop a deeper understanding of what life is.

### WHAT IS LIFE?

It is relatively easy to determine that a human being, an oak tree, and a grasshopper are living whereas rocks are not. Yet it remains difficult to define life. At one time it was believed that a living system could be distinguished from a nonliving system by its possession of a special "vital force." Now, after centuries of searching, we understand that there is no single substance or force that is unique to living things. Perhaps the best we can do toward defining life is to list the features that living things have in common. When we do this, we find that the characteristics that distinguish living things from nonliving things include a precise kind of organization, a variety of chemical reactions we term metabolism, the ability to maintain an appropriate internal environment even when the external environment changes (a process referred to as homeostasis), movement, responsiveness, growth, reproduction, and adaptation to environmental change. We consider each of these characteristics in the following sections.

FIGURE 1-2 This sea urchin is composed of millions of cells are organized to perform varied functions.

## 理学部学生に望む英語力 (2)

博士後期課程 (ドクターコース):

自分が中心となって専門研究を推進する

数 10 編の学術論文 (英文) を、独力で、日常的に読み進める。  
専門書 (英文) も同様に、独力で読み進める。

学術論文 (英語) を教師の指導のもとで執筆する

自在に書けるまでは無理としても、独力で英文原稿を書く

•国内開催の国際研究会で、1 - 2回、英語による口頭発表 (プレゼンテーション) を行い、質疑応答も行う。英語による講演内容をおおよそ理解する。個人レベルでの英語による討論ができる。

•学術雑誌との英語によるやり取りを、教師の指導のもとで行う

•論文や会議などに関する、簡単な英文手紙やE-メールのやり取りを行う

## まとめ 理学部学生に望む英語力

理系英語教育の目標として

大学院修士課程に進学し、(英語を必要とする) 専門研究を行い、  
専門的な理系職種に企業就職した後にも役立つこと

1. 論理的な文章の重要性。洗練された英語表現は不要。
2. 高校水準の文法や構文でOK。ただし、実践的体験を通して身につけることが重要。
3. これを、まずはリーディングの実践的能力から。
4. リスニングやスピーキングを実践できることを求めたいが、現状では、大学院の修士から博士課程になってから。



## 工学部における英語教育の概要

- 教養系科目（Gコード科目）
  - 全学科共通〔必要要件：2単位以上〕
  - 1～2年次に聴講
  - 習熟度別クラス：6段階あるいは7段階
    - センター試験（英語），推薦入試（英語）の点数により割り振り
- 専門系科目
  - 各学科の教育理念・目標等に従って科目設定
  - 主に4年次に開講

## 英語講義の開講状況（工学部）

H17年度 入学生	1年次		2年次		3年次		4年次	
	1期	2期	1期	2期	1期	2期	1期	2期
機械システム	○	○	△				●	●
電気電子	○	○	△		●		●	
情報	○	○	△		●	●	●	
福祉人間	○	○	△	●			●	
化学システム	○	○	△				●	●
建設	都市	○	○	△			●	●
	建築	○	○	△				
機能材料	○	○	△				●	●

## 専門系科目の英語（開講科目）

- 機械システム工学科
  - 技術英会話（4年1期・週1回）【会話】
  - 英文輪読Ⅰ，Ⅱ（4年1,2期・週1回）【読解】
- 電気電子工学科
  - 技術英語（3年1期・週1回）【読解, 作文, 会話】
  - 論文輪講（4年1期・週1回・必修）【読解】
- 情報工学科
  - 技術英語Ⅰ，Ⅱ（3年1,2期・週1回）【読解】
  - 論文輪講（4年1期・週1回・必修）【読解】

## 専門系科目の英語（開講科目）

- 福祉人間工学科
  - 技術英語（2年2期・週1回）【読解, 発表】
  - 英文輪読（4年1期・週1回）【読解】
- 化学システム工学科
  - 論文輪講Ⅰ，Ⅱ（4年1,2期・週1回）【読解】
- 建設学科 社会基盤工学コース
  - 技術英語Ⅰ，Ⅱ（4年1,2期・週1回）【読解】
- 機能材料工学科
  - 技術英語（4年1期・週2回）【読解】
  - 論文輪講（4年2期・週2回）【読解】

## 専門系科目の英語

- 開講科目の特徴
  - 4年次開講科目が多い
  - 研究論文，記事等の「読解」が中心
  - 研究室単位で実施されるものも多い
- 専門で重要視される英語力
  - 当然ながら，Listening, Speaking, Reading, Writingのすべて
  - まずは，技術的な文章の読解及び作文の能力
    - ⇒ 文法の理解と語彙力

## 研究室所属学生の国際会議発表 過去5年間（2003-2007）

年	月	学生	国際会議名	場所	形式
2003	1	M2, M1	Photonics West	米国カリフォルニア	ポスター
2004	6	M1, D1	EM-NANO	新潟	ポスター
2005	1	M1, M1, D2	Photonics West	米国カリフォルニア	ポスター
	9	M1	OIE'05	札幌	ポスター
	12	M2	ISOT	札幌	口頭
2006	1	D3	Photonics West	米国カリフォルニア	ポスター
	10	M2	Optics East	米国カリフォルニア	ポスター
2007	1	M1	Fusion Tech.	新潟	ポスター
	1	D1	Photonics West	米国カリフォルニア	ポスター

## 高校英語に期待すること

- **理系の職業こそ英語力が必要**
  - 高校生に「理系は英語を使う機会が少ない」という誤った認識があれば、改めるよう指導してほしい。
- **文法、語彙力などの基礎英語力**
- **英語で身につけた英語力**
- **論理的な英語力**
  - 論理的に記述された英文に触れる。
- **確かな日本語力**

ご静聴ありがとうございました。